京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **35** (2016), 1–34

タマン語の系統再考

藤原　敬介

【要旨】本稿では、Brown［1911］に記録された 75 項目のタマン語語彙資料を再検討する。さらに、ほぼ最後とみられる話者から採集した数語の語彙資料も活用し、チベット・ビルマ語派におけるタマン語の位置について考察する。調査の結果、以下の諸点があきらかとなった。

1. タマン語の音素としては/a, e, ɛ, i, ɨ, ɐ, o [ɔ, ɑ], u, ə; p, p^h, t, t^h, c [ts, tʃ], k, m, n, ŋ, r, l, s (s^h), ʃ, x, h, w (v), y/が推定される。
2. PTB からの改新としては、低母音の上昇（*-a > *-ɔ）、軟口蓋閉鎖音の語頭における摩擦音化（*k- > x-）、語末における消失（*-ak > -a）、高母音のあとでの付加（*-i > *-ik > -ek, *-u > *-uk > -ouk）、*gry-の破擦音化（*gry- > c-）が特徴的である。
3. ルイ語群に特徴的な語彙として否定接頭辞、「置く」、「行く」などがみられる。また、「太陽」の構成要素に「目」をもつ点もルイ語群的改新である。ただし、ルイ語群であると決定づける証拠はない。
4. 東北インドからビルマにかけて分布するさまざまな TB 系諸言語と共有する語彙が散見される。各語群をむすびつける「繋聯言語」とかんがえられる。

キーワード: タマン語、チベット・ビルマ語派、ルイ語群、比較言語学、繋聯言語

0　はじめに

本稿では、Brown［1911］に記録された 75 項目のタマン語（Taman）語彙資料を再検討する。さらに、ほぼ最後とみられる話者から採集した数語の語彙資料も活用し、チベット・ビルマ語派（Tibeto-Burman: 以下 TB と略す）におけるタマン語の位置を考察することを目的とする。

本稿の構成は以下のとおりである。**1** ではタマン語とタマン人について概況をのべ、先行研究についてふれる。**2** ではタマン語の音韻論を再検討する。**3** ではタマン語の語彙を近隣諸語と比較する。**4** ではタマン語の新資料を提示し、分析する。**5** では本稿をまとめ、今後の課題についてのべる。本稿末尾に**記号一覧**と、本稿で言及する**言語名一覧**をしめす。さらに、**附録 1** として Brown［1911］にしめされるタマン語を再掲し、他の TB 諸語と比較した資料を提示する。**附録 2** として、**4** で提示した新資料のうち、タマン語による歌を採譜したものを掲載する。**附録 3** として TB 諸語の系統樹をしめす。

1　タマン語とタマン人

1.1　タマン語とは

タマン語とは、TB に属する言語である。タマン人は、上ビルマ・ホーマリン（Homalin）地方のタマンディ（Htamanthi[注1]）村近辺に居住している。ただし Lewis et al.［2016］によると、タマン語の最後の話者は 1990 年代にいなくなった。資料は、上ビルマ・チンドゥイン地方に赴任していたイギリス人行政官である R. Grant Brown によって記録された 75 項目[注2]の語彙資料をふくむ Brown［1911］のみである[注3]。

Brown［1911: 312］によると、タマン語と非常によくにた言語にマリン語（Malin）がある。ただし、マリン語そのものについての言語資料はしられていない[注4]。

1.2　タマン人とは

タマン語自体はほぼ死語である。しかし、民族意識としてみずからをタマン人であるとかんがえている人々は今も存在する。タマン人はタイ系のシャン人と同一視され

注1 現地のタイ・ナイン人によると、この地名はタイ・ナイン語で $t^{h}am^{3}$ ‘cave’ ＋ mon^{3} ‘be happy’ ＋ $s^{h}ɤ^{1}$ ‘tiger’「虎がたのしくくらす洞窟」という意味らしい（筆者はタイ・ナイン語の形式を正確に表記することができない。ここでは便宜的に、分節音が語源的に対応するシャン語の形式でしめした。タイ・ナイン語とは声調と母音ににちがいがあると推定される）。なお、タマンディという地名はビルマ語では ထမံဝီ [t^{h}əmaɴði] と表記され、一般に Htamanthi とローマ字表記される。ただし、ビルマ文字の無声有気音は無声無気音としてローマ字転写されることもある。だから Brown［1911］では Tamanthi と表記されている。タマン人に対して Taman という表記が通用しているのも、同様の理由による。

注2 このうち#38 ‘female’ と#59 ‘mother’ は同形（#42 ‘give’ は同音異義）、#62 ‘river’ と#73 ‘water’ は同一語、#64 ‘rock’ と#69 ‘star’ がおそらく同一語である。したがって、実質的には 72 項目である。

注3 Luce［1985］にもタマン語資料がある。ただし、語例をみるかぎり Brown［1911］の表記を変更しただけのものである。Brown［1911］にあって Luce［1985］にないものは#11 ‘ape’、#28 ‘call’、#34 ‘eat’、#54 ‘kill’、#55 ‘know’、#62 ‘river’、#67 ‘silk’、#68 ‘speak’、#74 ‘write’ の 9 語である。詳細は**附録 1** を参照。なお、Brown［1913: 34］には参考資料として “File 2P.-21 of 1911, Taman and Malin vocabularies” というものがあがる。この資料が現在どこにあるかは不明である。

注4 筆者が 2015 年 3 月 1 日にマリン村を訪問したところ、民族としてのマリン人は存在していた。だが、マリン語話者はすでに存在していなかった。ただし、この村の僧院の僧院長でホーマリン出身のタイ・ナイン人のお坊さんによると、かつてマリン人の寺男がいた。そして、その寺男が発音していた「ジャックフルーツ」に相当するマリン語の単語をお坊さんは記憶していた。[lək^{h}ùɕî] と発音していたらしい。タイ・ナイン語では mak^{2}mə$laaŋ^{4}$ であるそうだ。なお、マリンとは、タイ・ナイン語で $maan^{3}$ ‘village’ ＋ $laaŋ^{4}$ ‘watch tower’「見張り台の村」という意味であるという。

ることもあるけれども、タマン人とシャン人とは言語も文化も異なる［Brown 1913: 30–31］。タマン人は現在では日常的にはタイ・ナイン語やビルマ語をはなす。タマン人は「虎に変身」する民族として現地ではしられている。しかし、Brown［1911: 306］によると、当時すでに「虎に変身」できるタマン人はいなかったそうである。

1.3　先行研究

タマン語の TB での位置については、(1) にしめす見解がある。Brown［1911］以外は、どの論者も結論をのべるだけであり、具体例をほとんどしめしていない。

(1) a. Brown［1911: 311–312］: さまざまな言語の特徴がみられ、特にどの言語群とちかいかはきめられない。
b. Lowis［1919: 26］: 民族的にはカドゥー人と関係しているかもしれない。
c. Benedict［1972: 5–6］: ルイ語群（Luish）やジンポー語とつよい関係にある。
d. Shafer［1974: 5］: 十分な資料がなければ帰属は決定できないが、ビルマ諸語の影響をつよくうけつつも、ルイ語群に特徴的な語彙が散見される。
e. Lewis et al.［2016］、Glottolog 2.7[注5]: ジンポー諸語に属する。
f. STEDT Database: サック諸語（Asakian[注6]）に属する。

本稿での結論は Brown［1911］（1a）や Shafer［1974］（1d）にちかい。ただし本稿では、Brown［1911］よりもおおくの根拠をしめしながら、TB におけるタマン語の位置を考察していく。なお、本稿では音と語彙の比較を中心とし、文法についてはあつかわない。

注5 http://glottolog.org/（最終確認 2016 年 9 月 2 日）

注6 Matisoff［2013b: 25］による造語。系統的にはおおむね Tibeto-Burman > Jingpho-Asakian > Asakian という関係にある。Grierson［1904］や Benedict［1972］などでルイ語群とよばれていたものとおなじ言語群をさす。「ルイ」という名称がメイテイ語で ‘slave or dependent’［Damant 1880: 240］であり、言語名として適当ではないという理由から、チャック人やカドゥー人の自称にふくまれる Sak をもとにして Asakian と造語した。「ルイ（Lois）」という名称の由来については Devi［2002: 17–20］にくわしい解説がある。Devi［2002］によるとルイには三種類の意味がある。すなわち（A）‘Lanngam Loi’ (conquered one),（B）‘Lanpha Loi’ (captured from war and rehabilitated by the king),（C）‘Loi-tharakpa’ (put into exile) である。このうち（B, C）については、アンドロ人やセンマイ人の居住地が流刑地などであったことがないので、おそらく該当しないとされる。すなわち、（A）の意味が「ルイ民族」としての本来的な意味であったとされる。そして、のちにメイテイ人がヒンドゥー教を受容したさい、ヒンドゥー教を受容しなかった民族が「ルイ」とよばれるようになり、メイテイ人の王に税をおさめるようになったという。

2　音韻論

Brown［1911］によるタマン語の表記は音声表記である。ただし、音素分析されているわけではない。また、実際の音価が推定しにくいものもある。75 項目のかぎられた語彙から確認されることをのべる。

2.1　音節構造

タマン語の音節構造は（2）のとおり[注7]。C_1 には {p (b), p^h, t, t^h, ts (tʃ), k, m, n, ŋ, r, l, s (s^h), ʃ, x, h, w (v), y} すべての子音が、C_2 には {p, k, m, n, ŋ} が、G には {w} のみが、V には {a, e, è, i, ì, ɔ, ɑ, ɐ, ò, u, ù, ë, ə} が確認される。

(2) C_1GVC_2

2.2　子音

表 1 は Brown［1911］にあがる語例から抽出し、筆者の解釈により音素となりうる子音をしめしたものである。⋆ 語末子音として可能、⋆⋆ 介子音として可能であることをしめす。(...) にいれたものは Brown［1911］に音声表記されるけれども、筆者の解釈では異音であり、音素ではないことをしめす。表中で特記すべき点は、（A）k^h ではなく x が音素となっている、（B）祖語の*ɡry-が c-で対応している、という点である。

表 1　タマン語の子音

	唇音	歯音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	*p⋆ (b) p^h*	*t t^h*	*ts (tʃ)*	*k⋆*	
摩擦音	*(v)*	*s s^h*	*ʃ*	*x*	*h*
鼻音	*m⋆*	*n⋆*		*ŋ⋆*	
流音		*l r*			
半子音	*w⋆⋆*		*y*		

以下に子音の代表例をあげる。

(3)　a. {p} /p/ < PTB *b-, *-p
#4 ‘four’ Ta **pəli**; PTB ***b-ləy** (STEDT #2409)
#66 ‘snake’; Ta **pɐ**; PTB ***bəw** (STEDT #2178)
#18 ‘bear’; Ta **s^hap**; PLu *k^H-**sap**[注8]

[注7] 以下、{...} で表記されるものは Brown［1911］による音声表記である。
[注8] PLu にみられる ^{H} は有気音ではない。高声調要素であることをしめす。

b. {b}[注9] /p/
#12 ‘bag’; Ta **t^{h}ùm***bɔ*; TL **t^{h}oŋ^{1}**

c. {p‘} /p^{h}/ < PTB *b-, *p-
‘arrow’; Ta **p^{h}əlɔ**; PTB ***g/b/m-la-y** (STEDT #2386)
‘ear’; Ta *nə***p^{h}ɑ**; PTB *r-**pak** (STEDT #821)

(4) a. {t}[注10] /t/ < PTB *d-
#9 ‘nine’; Ta **təxɐ**; PTB ***d/s-kəw** (STEDT #2364)

b. {t‘} /t^{h}/ < PTB *t-
‘water’; Ta **t^{h}i̱**; PTB *m-**t(w)əy**-n ≋ *m-**ti**-s (STEDT #298)

(5) a. {k} /k/ < PTB *g-, *-k[注11]
#47 ‘head’; Ta *kə***kɐ**; PTB *m/s-**gaw** (STEDT #386)
#36 ‘eye’; Ta **pek***kwe*; PTB *s-**mik** (STEDT #682)

b. {x}[注12] /x/ < PTB *k-
‘bitter’; Ta **xɔ**; PTB *b-**ka**-(n/m/ŋ) (STEDT #229)

(6) a. {ts} /ts/ (c) < PTB *ry-(?), PLu *c-
#65 ‘salt’; Ta **tsùm**; PTB *g-ryum (STEDT #2644) cf. PLu ***cɨm**(?) < *ryum(?)
#40 ‘fish’; Ta **ətsɔ**; PTB — cf. PQ *r-**dzwa** (STEDT #5673)

b. {tʃ}[注13] /ts/(?) < PTB ?, PLu *c-
#21 ‘bird’; Ta *kə***tʃek***sɔ*; PTB — cf. PLu *u-**cík**-sa

注9 b はこの一例のみ。他の有声閉鎖音がなく、鼻子音のあとという位置も考慮すると、無声閉鎖音が有声化したとかんがえられる。閉鎖音類に有声と無声の対立がないことは、シャン語やルイ語群の特徴でもある。

注10 音節末に-t をもつ語がない。このことは、（12b）でしめすように、祖形の*-at が-e で対応することと相関する。

注11 音節末の-k については、*i のあとで二次的に付加する例もある。注22 を参照。

注12 *k- > *k^{h}- > x-という変化があったと推定される。

注13 {tʃ} は前舌母音の前にあらわれる傾向にある（ただし#55 ‘know’ tʃùp は例外）。後舌母音のあとでのみあらわれる {ts} とほぼ相補分布し、同一音素にまとめうる。

(7) a. {s}[注14] /s/ < PTB *s-, PLu *s-
#3 ‘three’; Ta **sùm**; PTB ***g-sum** (STEDT #2666)
#34 ‘eat’; Ta **sɔ**; PTB *dz(y)a-k/n/t/s (STEDT #36) cf. PLu ***sa**
#58 ‘moon’; Ta **səlɔ**; PTB ***s-(g)la** (STEDT #1016)

b. {sʿ} /s^h/ < PTB *s-
#23 ‘blood’; Ta **s^he**; PTB **s-hywəy**-t (STEDT #230)

c. {ʃ} /ʃ/ < PTB *tsy-
#53 ‘iron’; Ta **ʃa**; PTB *l-**tsyak** (STEDT #6365: provisional)

d. {h} /h/ < PTB ?, PLu *h-
#43 ‘go’; Ta **hɔ**; PTB *s-wa BE IN MOTION, GO, COME (STEDT #2774)
cf. ‘walk/bring’ PLu ***ha**

(8) a. {m} /m/ < PTB *m-, *-m
#27 ‘buffalo’; Ta **mɔk**; PTB ***muk** CATTLE (STEDT #5607)
#3 ‘three’; Ta **sùm**; PTB ***g-sum** (STEDT #2666)

b. {n} /n/ < PTB *n-, *-ŋ(?)[注15]
#2 ‘two’; Ta **nek**; PTB *g/s-**ni**-s (STEDT #2504)
#11 ‘ape’; Ta **jùn**; PTB ***ywaŋ** (STEDT #6049)

c. {ŋ} /ŋ/ < PTB *ŋ-, *-ŋ
#5 ‘five’; Ta **məŋɔ**; PTB ***l/b-ŋa** (STEDT #1306)
#26 ‘bone’; Ta **raŋ**; PTB *g-**r**(w/y)**a**(**ŋ**/k) (STEDT #238)

(9) a. {l} /l/ < PTB *l-
#63 ‘road’; Ta **lam**; PTB ***lam** (STEDT #1017)

b. {r} /r/ < PTB *r-
#26 ‘bone’; Ta **raŋ**; PTB *g-**r**(w/y)**a**(**ŋ**/k) (STEDT #238)

注14 タマン語周辺の TB で/c/と/s/と/s^h/が対立する言語は、管見のかぎりでは存在しない。チャック語のように/c/と/s/が対立するか、ビルマ語やカドゥー語、ガナン語のように/s/と/s^h/が対立することが一般的である。PTB の*s-が Ta で s-または s^h-で対応する事実から判断して、両者は同一の音素にまとめうる。なお、[s] と [s^h] の区別をしらない話者にとっては、両者はおなじようにきこえるために、混同が生じている可能性もある。

注15 音節末に-n がくるものは二例しか確認されない。そのうち同源形式があきらかなものは #11 ‘ape’ のみである。

(10) a. {w}[注16] /w/ < PTB *w-
#37 ‘father’; Ta **vɔ**, **wɔ**; PTB ***wa** (STEDT #5484)
#6 ‘six’; Ta *kwa*; PLu *k-ruk, PTB *d-k-ruk (STEDT #2621)
b. {j} /y/ < PTB *y-
#11 ‘ape’; Ta **jùn**; PTB ***ywaŋ** (STEDT #6049)

2.3 母音

Brown［1911: 312–313］による母音の解説のうち、タマン語の形式として実際に確認されるものは次のとおりである。ただし、‘̀’ が下降調をあらわすとかんがえても、数がおおすぎる。音素としてはまとめうるものをふくんでいる。

- a: F. p*a*tte, p*a*rt
- ɑ[注17]: E. f*a*ther
- e: F. l*e*s
- è: E. m*e*n
- i: E. mach*i*ne
- ì[注18]: E. *i*t
- u: E. r*u*le
- ù[注19]: E. p*u*t
- ə: E. *a*miss
- ɐ: E. b*u*rn
- ɔ: E. p*aw*, F. n*o*te
- ɔ̀[注20]: E. n*o*t
- ë: 中舌母音[注21]

母音については PTB との対応を網羅的にあげることが困難である。代表的な対応例を以下にあげる。

(11) a. {a} /a/ < PTB *-ak
#12 ‘arm, hand’; Ta **la**; PTB ***lak** (STEDT #695)
b. {u} /u/ < PTB *-u
#25 ‘body’; Ta **tu**; PTB ***du** (STEDT #14) cf. TL **to**[1]

注16 {w} と {v} は自由に交替するので、本稿では/w/を音素と解釈する。TB で両者を音素とする言語は一般にはない。なお、チャック語では両者が音素であるけれども、w は原則として借用語にのみあらわれる。

注17 Brown［1911: 312］による表記はギリシャ文字の Ω ににている ⟨ɷ⟩ である。ただし、他の語例での印刷から判断するかぎりでは、ɑ で代用して問題ないとおもわれる。

注18 C{ì}C または V{ì}C という環境でのみ確認される。{i} と相補分布しているので、音素としては一つにまとめうる。

注19 C{ù}C または {ù}VC という環境でのみ確認される。{u} と相補分布しているので、音素としては一つにまとめうる。

注20 Brown［1911: 313–315］の語例には {ò} があがるのみで、{ɔ̀} はみられない。そして {ò} があらわれる環境は {òùŋ/n} のみである。音素としては {ɔ} と一つにまとめうる。

注21 “a sound apparently partaking of *e* and ʌ, as defined above; approaching the F. *peu*, but formed quite differently, with the lips loose.”［Brown 1911: 313］

(12) a. {e} /e/ < PTB *-i, *-əy-t
#2 ‘two’; Ta **nek**[注22]; PTB *g/s-**ni**-s (STEDT #2504)
#23 ‘blood’; Ta **s^{h}e**; PTB **s-hywəy**-t (STEDT #230)
b. {è} /ɛ/(?) < PTB/PLu *-al(?), *-at(?)
#39 ‘fire’; Ta **vè**; PTB ***b^{w}ar** ≋ ***p^{w}ar** (STEDT #2152) cf. PLu ***wal**
#8 ‘eight’; Ta *pə***sè**; PTB *b-**r-gyat** ≋ *b-**g-ryat** (STEDT #2259) cf. PLu ***cat**

(13) a. {ɔ} /o/ < PTB *-a
#5 ‘five’; Ta **məŋɔ**; PTB ***l/b-ŋa** (STEDT #1306)
b. {ɑ}[注23] /o/ < PTB *-a
#72 ‘tooth’; Ta **vɑ***kòùn*, **wɑ***kòùn*; PTB *s/p-**wa** (STEDT #632)
c. {ɐ} /ɐ/ < PTB *-əw, PLu *-u(w)
#66 ‘snake’; Ta **pɐ**; PTB ***bəw** (STEDT #2178) cf. PLu *k-**phúw**
#9 ‘nine’; Ta **təxɐ**; PTB ***d/s-kəw** (STEDT #2364)

(14) a. {i} /i/ < PTB *-i(y), *-əy
#10 ‘ten’; Ta **ʃi**; PTB ***ts(y)i(y)** ∼ *tsyay (STEDT #2748) cf. PLu *cí, *sí
b. {ë}[注24] /ɨ/(?) < PTB *-ay(?), *-um(?)[注25]
#45 ‘good’; Ta *kə***më**; PTB ***mway** (STEDT #2457) cf. PLu ***méy**
#38 ‘female’; Ta **nëm**; PTB ***s-nam** (STEDT #2486) cf. J **num^{33}** ‘woman’
#42 ‘give’; Ta **nëm**; PTB — cf. Chairel **num**

(15) {ə} /ə/: CəCV(C) の環境でのみあらわれる。
#9 ‘nine’; Ta **təxɐ**; PTB ***d/s-kəw** (STEDT #2364)

以上をまとめると、表 2 のようになる。

注22 e のあとで祖形によらない k があるとき、母音は*-i にさかのぼる。*i のあとで k が付加したあとで、*i から e への変化があったと推定される。平行例に#29 ‘cat’、#56 ‘man’、#74 ‘write’ がある。高母音のあとでの閉鎖音付加についてはチャクパ語やガナン語にもみられる。Mortensen［2004, 2012a］がしめすように、東北インドから上ビルマの諸言語にみられるだけでなく、通言語的にも散見される。なお、類似した音変化は、たとえばビルマ語においても通時的にみられる。ビルマ語では*-iy から-e への変化がしられている［Nishi 1999: 39］。また、*-u のあとで k が付加したとみられる例として#50 ‘horse’ がある。

注23 PTB *-a 由来であると明白な例から判断して、{ɔ} と {ɑ} はひとつの音素にまとめうる。

注24 語例がすくなく、確認される環境も m-と n-に限定される。{i} や {u} と相補分布しており、音素としてまとめられる可能性がある。

注25 ジンポー語とチャイレル語とで-um となるものが、Ta では-ëm で対応している。

表 2　タマン語の代表的母音

Brown	{a}	{e}	{è}	{i}	{ë}	{ɔ}	{ɑ}	{ɐ}	{u}	{ə}
本稿	/a/	/e/	/ɛ/(?)	/i/	/ɨ/(?)	/o/	/o/	/ɐ/	/u/	/ə/
PTB	*-ak	*-i	*-al(?)	*-i(y)	*-ay(?)	*-a	*-a	*-əw	*-u	—
		*-əy-t	*-at(?)	*-əy	*-um(?)			*-uw		—

2.4　声調

TB 系では声調が弁別的である言語がおおい。だから、タマン語でも声調は弁別的であった可能性がたかい。Brown［1911: 313］では高声調に ‘¯’、低声調に ‘_’、下降調に ‘`’ をもちいると明記されている。ただし、実際には高声調の語例がなく、低声調も #73 ‘water’ の一例のみである。下降調として#3 ‘three’、#7 ‘seven’ など 10 語があがるものの最小対がなく、どの程度ただしく声調を表記しているかは不明である[注26]。

3　語彙の比較

本節ではタマン語の語彙を周辺言語と比較する。固有語の対応を明確にするために、まず借用語の対応についてのべる。ついで、タマン語周辺の TB 系諸言語と比較する。

3.1　借用語

タマン語が TB 系であることは基礎語彙の比較から確実である。したがって、タイ系のシャン語（Shan, Tai Long: TL と略記）と共通する語彙は借用語であると推定される。ただし、タマン語と隣接する地域ではなされる言語はタイ・ナイン語であり、標準的なシャン語とは相違する音対応がある。（16）にタイ系言語からの借用語の例をあげる。

(16)　a. #15 ‘bag’; Ta **t^{h}ùm***bɔ*; TL **t^{h}oŋ^{1}**
　　b. #44 ‘gold’; Ta **xɑm**; TL **k^{h}am^{4}**
　　c. #57 ‘male’; Ta **laktʃaŋ**; TL **luk^{3}tsaaj^{4}** ‘male child’
　　d. #67 ‘silk’[注27]; Ta **nè**; TL **laaj^{3}** cf. J lai^{33}

注26 Luce［1985］によるタマン語資料では、アクセント記号が無視されている。

注27 ‘silk’ は ‘thread’ に通じ、Proto-Tai *ʔd- に由来する［Li 1977: 107–108］。そして、シャン語（TL）の l- がタイ・ナイン語（TN）では n- で対応すると推定される例である。Ta の形式は、直接的には TN からの借用とおもわれる。なお、タマン語とちかい関係にあるとされるジンポー語では l- で借用されている。この事実は、タマン語とジンポー語では、借用元のシャン語の種類が異なることを示唆する。

3.2　TB 諸語一般との比較

タマン語が TB 系であることは、TB 諸語で一般にみられる語彙との音対応からあきらかである。（17）に代表例をあげる。

(17) a. #22 ‘bitter’; Ta **xɔ**; PTB *b-**ka**-(n/m/ŋ) (STEDT #229)
b. #37 ‘father’; Ta **vɔ** ∼ **wɔ**; PTB ***wa** (STEDT #5484) ≋ *p^wa (STEDT #2546)
c. #63 ‘road’; Ta **lam**; PTB ***lam** (STEDT #1017)

Brown［1911］にあがる 75 項目の語彙のうち、シャン語からの借用語 4 語および実質的には同一項目とみなしうる 3 語を除外した 68 語のタマン語語彙を、タマン語と地理的に比較的ちかいところではなされる TB 諸語（ジンポー・ルイ語群の諸言語および PTani, PKC, PNN, PCN, PTk, PBG, PLB, PKar）と比較した。タマン語と同源形式とみなしうる語数を一致数にしたがって四群にわけてしめせば、（18）のとおりである[注28]。

(18) a. Jingpho 45/68（66%）、PNN 44/68（64%）
b. PLu 43/68（63%）、Sengmai 41/68（60%）、Cak 40/68（58%）、Andro 40/68（58%）、Ganan 39/68（57%）、Kadu 38/68（55%）[注29]
c. PKC 33/68（48%）、PLB 33/68（48%）、PTk 30/68（44%）
d. PCN 29/68（42%）、PBG 27/68（39%）、PKar 25/68（36%）、PTani 20/68（29%）

（18）からは、ジンポー語と北ナガ祖語との類似度がもっともたかく、ルイ語群の諸言語がそれにつづいているとわかる。以下、特異な対応を中心に、タマン語と他語派との関係を検討する。

3.3　サル語群との比較

タマン語の周辺ではなされるジンポー語や北ナガ諸語、ルイ語群の諸言語は、TB のなかでもサル語群（Sal languages: Burling［1983］）とよばれる言語群に属する。サル

注28 同源形式であるかどうかは、**附録 1** で同源形式を**太字**にしてしめした。また、一致数をかぞえる際には、全体的な一致も、部分的な一致も、おなじようにあつかった。たとえば#7 ‘seven’ において、チャック語やジンポー語はタマン語と全体的に一致する。他方、PKC は接頭辞部分のみが一致する。このような場合であっても、一致数としては、いずれの言語も同様に「1」として計算した。ここでしめす一致数はひとつの目安にすぎない。一致数の中身は、しばしばことなっている。

注29 ルイ語群の中で Kadu と Ganan の一致数がややひくい理由は、両言語では「五」以上の数詞がシャン語からの借用語になっているためである。

語群を特徴づける語彙としては（19）にあげる ‘sun’ と ‘fire’ があげられる[注30]。

(19) a. #71 ‘sun’ Ta *pupek*; PTB ***tsyar**; J **dźān**; Namsang（N.Naga）**san**, Moshang（N.Naga）**śar**; Garo（BG）**sal**; Crl **sal**; Luish C **cəmíʔ**, K/G **səmíʔ**, A/Se **camit**

b. #39 ‘fire’ Ta **vè**; PTB ***b^{w}ar** ≍ ***p^{w}ar**; J **ʔwàn**; Namsang（N.Naga）**van**, Moshang（N.Naga）**var**; Garo（BG）**waʔl**; Crl **phal**; Luish C **vaiŋ**, K/G **wan**, A/Se **wal**

（19）において ‘fire’ はタマン語もサル語群の形式と同源形式である。しかし ‘sun’ は同源形式とはいえない[注31]。

サル語群を特徴づける形式として、‘foot’ と ‘hand/arm’ の関係をさらにあげることができる。サル語群では一般に ‘foot’ と ‘hand/arm’ の相違が、語末における-k の有無にあらわれる。（20）にしめすように、タマン語の ‘hand/arm’ はサル語群と同源である。しかし ‘foot’ が確認されない。‘hand/arm’ が PTB と共通するものには、たとえばビルマ語 ⟨lak’⟩ がある。ただし ‘foot’ は ⟨khre⟩ であり、サル語群には属さない。したがって、タマン語もサル語群に属するといえるかどうかはわからない[注32]。

(20) ‘foot’ vs. ‘hand/arm’ Ta — vs. **la** < ***lak**; Crl **la** vs. **lak**; Luish PLu ***ta** vs. ***tak-**, C **ʔəta** vs. **taʔmiŋ** ‘nail’, K/G **ta** vs. **taʔmiŋ** ‘nail’, A/Se **ta-** vs. **takmeŋ** ‘nail’; BG Garo **dźa** vs. **dźak**, Dimasa **ya** vs. **yau**; N.Naga Tableng **ya** vs. **yak**, Tamlu **la** vs. **lak**, Banpara **tśia** vs. **tśak**, Namsang **da** vs. **dak**, Moshang **ya** vs. **yak**

（19）と（20）より、タマン語がサル語群に属する可能性はあるけれども、確実にサル語群に属するとまではいえない。

3.4 ルイ語群との比較

他の TB 諸語には（ほぼ）みられず、ルイ語群に特徴的といえる言語特徴としては（21）がある［藤原 2014a: 274 (12), 275 (17)］。

(21) a. 入破音にかかわる語彙とその音対応

注30 （19）の語例は Benedict［1972: 7］にルイ語群の例を追加したものである。なお、Matisoff［2013b: 40–44］は Burling［1983］を再検討し、サル語群を特徴づける形式を吟味している。そして COOKING POT, MOTHER, PESTLE, SKY / RAIN の 4 語をもっとも信頼できる同源形式として提示する。いずれの形式もタマン語にはそもそも確認されないか、確認されても同源形式とはいえない。

注31 注37 で後述するように、‘sun’ は ‘eye’ という要素をふくみ、ルイ語群にちかい。

注32 （20）の語例は Benedict［1972: 34］にルイ語群の形式を追加したものである。

b. 類別詞と数詞「一」の辞順（CL-‘one’ はタイ諸語的）
c. 否定接頭辞: PLu ***á-** ＋ V ＋ 否定述部
d. 複数動作主標識: V ＋ PLu ***-kí/hí***
e. 移動にかかわる助動詞: PLu ***-a*** ‘ANDATIVE’, PLu ***-aŋ*** ‘COMPLETIVE’

Brown［1911］をみても（21a, d, e）については、資料がない。（21b）については、数詞「一」は確認されるけれども、類別詞が未確認である。（21c）については、**4**. 新資料で後述するように、タマン語でも **ʔə-**であるとわかった。

TB 一般にみられながらも、ルイ語群やジンポー語において特徴的な対応をみせる語彙には ‘salt’ がある。この語は PTB *gry-がルイ語群やジンポー語では破擦音となる。タマン語でも破擦音であり、類似した改新といいうる。

(22) #65 ‘salt’; Ta **tsùm**; PLu ***cɨm**(?) < ***ryum**(?), J **tʃum**^{31}; PTB ***g-ryum** (STEDT #2644)

他方、ルイ語群やジンポー語において特徴的な対応をみせながらも、TB 一般にみられる語彙であり、タマン語でも TB 一般とおなじ対応をみせる語彙に ‘moon’ がある。この語は、TB 一般やタマン語では l-で、ルイ語群やジンポー語では t-で対応する[注33]。この点からみれば、タマン語がルイ語群と特にちかい関係にあるとはいえない。

(23) #58 ‘moon’; Ta **səlɔ**; PLu *s-dá < *s-lá; PTB ***s-(g)la** (STEDT #1016)

ルイ語群およびジンポー語で共通するけれども、ほかの TB では（ほぼ）みられない語例として（24）が確認される。

(24) #18 ‘bear’; Ta **s^{h}ap**; PLu *k^{H}-**sap**, J **ts<u>a</u>p**^{55}; PTB —

ジンポー語にはなく、（ほぼ）ルイ語群とのみ共通する語例には（25）がある。

(25) a. #21 ‘bird’[注34]; Ta *kə***tʃeksɔ**[注35]; PLu *u-**cík-sa**; Meithei u**chek**
b. #43 ‘go’[注36]; Ta **hɔ**; ‘walk/bring’ PLu ***ha**; PTB s-wa BE IN MOTION, GO, COME (STEDT #2774)

注33 PTB の*l が t/d になる現象について詳細は Matisoff［2013a］を参照。
注34 ジンポー語 Jili 方言で *machik* という形式が記録されている［Brown 1837: 1033］（倉部慶太氏の教示による）。
注35 Ta kə-は動物接頭辞。
注36 ジンポー語の sa^{33} は同源形式かもしれない。だが、音対応が異なる。

タマン語とルイ語群でのみ類似する語構成をもつものに（26）がある。両者ともに ‘sun’ という語の構成要素として ‘eye’ をもつ点に特徴がある[注37]。

(26) #71 ‘sun’ Ta *pupek*; PLu *c-mík, C cəmíʔ, K səmíʔ, G səmíʔ, A/Se chamīt, J tʃan^{33}; PTB *tsyar (STEDT #2753)

以上より、タマン語に（ほぼ）ルイ語群とのみ共通する言語特徴があることはあきらかである。ただし、ルイ語群に属するとする決定的な証拠まではみいだせない。

3.5　ジンポー語との比較

タマン語とジンポー語との同源形式のうち、両者にのみ共通する語彙は確認されない。ジンポー語と共通する語彙は、他の TB 諸語やルイ語群の形式とも共通する。

他の TB 諸語と比較して、タマン語とジンポー語に接頭辞が共通するものが散見される。ただし、いずれの接頭辞も PTB に再構されうるものであり、タマン語とジンポー語のみを特徴づけるとまではいえない。

(27) a. #5 ‘five’; Ta **məŋɔ**; J **mǎ^{31}ŋa^{33}**; PTB ***l/b-ŋa** (STEDT #1306)
b. #13 ‘arrow’; Ta **p^{h}əlɔ**; J **pa̰^{55}la^{55}**; PTB ***g/b/m-la-y** (STEDT #2386)
c. #35 ‘elephant’; Ta **məki**; J **mǎ^{31}kui^{33}**; PTB ***m-gwi(y)** (STEDT #2257)

3.6　北ナガ諸語との比較

タマン語と北ナガ諸語とで共通する同源形式は、他の TB 諸語のいずれかとも共通するものがおおい。タマン語と北ナガ諸語にのみ独自に対応する、あるいは特に類似する例は（28）にしめす二例のみである。

(28) a. #20 ‘big’; Ta **lwaŋ**; PNN ***gluŋ**
b. #26 ‘bone’[注38]; Ta **raŋ**; PTB *g-**r**(w/y)**a**(**ŋ**/k) (STEDT #238), PNN ***raːŋ**, Tangsa a**raŋ**

注37 Ta の形式は pu と pek からなる複合語である。pek は#36 ‘eye’ の pekkwe の一部である。‘sun’ に ‘eye’ の要素がふくまれることは、ルイ語群の特徴でもある。ただし、ルイ語群では ‘sunshine’ ＋ ‘eye’ という語構成である点が異なる。Matisoff［2013b: 90］は、類似した語構成をもつものとしてインドネシア語の ‘sun’ *mata hari*（eye-day）をあげる。Ta の形式を再考すると、pu はビルマ語の ⟨puu⟩ ‘be hot’ と同源である可能性がある。なお、Ta の pu は Atsi (Zaiwa) pui^{51} ‘sun’ と同源であるかもしれない。

注38 標準ジンポー語では ‘bone’ ìra であるけれども、カチン州北部の Gauri 方言ではìraŋ［Kurabe 2015: 9］、インド・アッサム州の Numphuk 方言では n^{4}raaŋ^{1}［Morey 2007］という形式があり、語末の-ŋ が保持されている（倉部慶太氏の教示による）。

3.7　その他の TB 諸語との比較

チン系諸語やタンクール系諸語と比較すると、タマン語では（29）の例が共通する。

(29)　a. #11 ‘ape’; Ta **jùn**; PTB ***ywaŋ**, PKC ***yooŋ**, PTk ***joŋ**

　　b. #73 ‘water’; Ta **t^{h}i̱**; PTB *m-**t(w)əy**-n ≍ *m-**ti**-s (STEDT #298), PKC *tuy, PTk ***dɨ**

ただし、チン系諸語やタンクール系諸語は、祖語の*s-が th-で対応する点に特徴がある。タマン語では s-のままである[注39]。したがって同一言語群に属するとまではいえない。

タマン語には、ほかのどの TB よりも中央ナガ諸語とよく対応するものが散見される。（30）の例は、祖語の高母音に二次的に-k が付加する例でもある。

(30)　a. #56 ‘man (human being)’; Ta **mek**; PCN *a-[h]**məjʔ**

　　b. #74 ‘write’; Ta **rek**; PTB *b-**rəy** DRAW / MARK / BOUNDARY (STEDT #2616), PCN *a-**rəjʔ**

散発的に、特定の TB 系言語とのみ同源形式と推定される語形が確認されることがある。（31a）はチアン系言語と、（31b）はチャイレル語[注40]と類似する例である。

(31)　a. #40 ‘fish’; Ta **ətsɔ**; PQ *r-**dzwa** (STEDT #5673)

　　b. #42 ‘give’; Ta **nëm**; Crl **num**

（30）や（31）のような事例が個別にはみられるけれども、いずれかの言語と特にちかい関係にあるとまではいえない。

4　新資料

タマン語の資料は Brown［1911］しかしられていなかった。だが、2015 年 3 月 2 日にビルマ・ザガイン管区・タマンディ村でタマン語をわずかにしる老女に筆者はであった。老女はタマンディ村とは別の村の出身であるらしい。2015 年 3 月 2 日現在 83 歳であった。両親はタマン語をはなした。しかし本人は、幼少時にはタマン語をすこししっていたものの、現在ではタマン語をほとんどしらない。現在は主としてタイ・

注39　たとえば#54 ‘kill’ Ta *səs^{h}èùk* に対して PTB *g/b-sat (STEDT #1018)、PKC *that-I、*thaʔ-II、PTk *t^{h}at である。

注40　チャイレル語はインド・インパール盆地ではなされていた死語である。Grierson［1904］や Matisoff［2013b: 16］によればルイ語群に属する。だが、サル語群に属するということ以上のことは実際には不明である［藤原 2014a: 277］。

ナイン語とビルマ語のみをはなす。30 分ほどの質問時間のなかで、タマン語の語彙をいくつかききだすことができた。質問はほぼすべてビルマ語でおこなわれた[注41]。ただし、まわりにいた人々が、筆者による質問内容をタイ・ナイン語で老女に説明してくれる場面もあった。以下に提示するタマン語は、声調を無視した簡易音声表記による。

（32）は、老女がおぼえていたタマン語の歌である。どのように分析しうるか不明な部分がおおい。拍子の切れ目で改行した。なお、**附録 2** に譜面をあげた。

(32) a. ʔiʔələyaŋ, ʔiʔələyaŋ
注 歌のはじまりをしめす掛け声のようなものとおもわれる。
b. nənum təhɔ ʔina hɔ「こどもたちは行った」
c. məceiʔcɔ he「こどもはどこですか」
注 məceiʔcɔ が ‘child’ であり、PTB *tsa-n と同源とおもわれる。
d. lɔ cɔ ci: 意味不明
e. məceiʔcɔ, ʔina 「こどもに言った」
f. nam ha mina「どこに行ったか」
g. hɔ pi cɔ「外に行った」

（33）～（38）は、質問をしていくなかで収集できた短文である。

(33) hɔ ʔəna, hɔ təyauŋ 「あっちに行った」
注 hɔ は「行く」。

(34) k^ham sɔ-nə-kɔ 「ご飯食べましたか」
注 k^ham が「ご飯」。Bodo akám ‘rice/food’ と同源か。sɔ は「食べる」。-nəはチャック語で他動詞化や強意をあらわす助動詞である-naʔ に通じている可能性がある。

(35) sɔ-kɛʔ 「すでに食べました」
注 sɔ は「食べる」。

(36) ʔə-sɔ-wɛʔ 「まだ食べていない」
注 ʔə-は否定接頭辞。ルイ語群にもひろく分布する。sɔ は「食べる」。

(37) sɔ-nə-kɔ-ya 「食べました」
注 sɔ は「食べる」。-nəはチャック語で他動詞化や強意をあらわす助動詞である-naʔ に通じている可能性がある。

注41 ビルマ語による録音の確認に際しては、加藤昌彦氏にご助力いただいた。

(38) tʰitum ŋɔ lɔ 「水さしはどこですか」
注 tʰi はあきらかに「水」。tum は「容器」などをあらわすとおもわれる。ŋɔ が「どこ」で、lɔ は疑問文標識か。

(39) ʔəyɔ pe 「どこに置いたか」
注 pe はおそらく「置く」。ʔəyɔ が「どこ」という意味らしい。

(40) wa dɔ 「来なさい」
注 wa は「来る」を意味する。PTB *s-wa BE IN MOTION / GO /COME（STEDT #2774）と同源形式であるとすれば、wɔ となるはずである。したがって、PTB *s-wa とは同源ではないとかんがえる必要がある。なお、dɔ で有声閉鎖音があらわれているのは、拘束形態素の頭子音が語中で有声化したものとおもわれる。

（41）は、老女以外のタマン人がわずかに記憶していた単語である。

(41) a. pi 「薪」*cf.* Meithei upi (STEDT)
b. məla[注42] 「茶」
c. məla sɔ nɔ 「茶を食べなさい」

以上の新資料のうち、これまでにしられていなかった語彙について確実にいえることは（42）のとおりである。

(42) a. 否定辞が ʔə-となる点はルイ語群的である。
b. 「置く」が pe となる点はルイ語群的である。他の TB では「与える」という意味となることがおおい。

5 おわりに

本稿では主として Brown［1911］によるタマン語の形式を再検討した。そして TB 諸語と比較した。先行研究において、タマン語はジンポー語やルイ語群と同一語群に属するとされることがある。実際、否定接頭辞や「行く」、「置く」などの形式は、ルイ語群とのみ一致する。また「太陽」の構成要素に「目」をもつ点は、ルイ語群と共通する語彙的改新である。さらに、祖形の*gry-が c-で対応する改新はタマン語とジンポー・ルイ語群で共通する。ただし、ほかの言語群とも共通する音韻的・語彙的改新も確認される。特に、祖語における高母音のあとで軟口蓋閉鎖音が付加する現象は、

注42 Ta -a ＜ PTB *-ak なので、PTB *s-la LEAF / TEA / FLAT THING（STEDT #786 provisional）とは直接的には関係しないと推定される。ただしビルマ語の {lak’phak’} とは関係している可能性がある。

タマン語やガナン語をふくめ、東北インドから上ビルマの TB 系諸言語で散見される。したがって、ルイ語群にのみ属するといえるような決定的な根拠は存在しない。タマン語は、語彙的には TB 諸語のさまざまな語群とむすびつく、一種の「繋聯言語（link language）」（藪［1993: 449］）といいうる。

今後は、タマン人がすむタマンディー地方にちかい地域の言語を調査し、タマン語との共通語彙をさぐることが課題である。

略号一覧

- {A}: A は Brown［1911］による音声表記
- ⟨A⟩: A は文字表記
- /A/: A は音素表記
- A ～ B: A と B は自由変異
- A ≋ B: A と B は語家族をなす
- A < B: A は B に由来する
- C: 子音
- CL: 類別詞
- G: 介子音
- V: 母音

言語名一覧

- A（Andro: 東北インド）: McCulloch［1859］（表記を一部あらためた）
- B（Burmese: ビルマ）: Brown［1911］
- C（Cak: バングラデシュ）: 筆者による一次資料
- Crl（Chairel: 東北インド）: McCulloch［1859］
- E Naga（Eastern Naga: ビルマ）: Brown［1911］
- G（Ganan: ビルマ）: 筆者による一次資料
- J（Jingpho: 東北インド・ビルマ）: 徐他編［1983］
- K（Kadu: ビルマ）: 筆者による一次資料
- Kch（Kachin: ビルマ）: Brown［1911］（J とおなじ言語をさす）
- Me（Meithei: 東北インド）: Brown［1911］
- OB（Old Burmese: ビルマ）: Brown［1911］または Nishi［1999］
- PBG（Proto-Boro-Garo: 東北インド）: Joseph and Burling［2006］
- PCN（Proto-Central Naga: 東北インド）: Bruhn［2014］（STEDT）
- PKar（Proto-Karen: ビルマ・タイ）: Luangthongkum［2013］（STEDT）
- PKC（Proto-Kuki-Chin: 東北インド・ビルマ）: VanBik［2009］（STEDT）
- PLB（Proto-Lolo-Burmese: 中国雲南省・タイ・ビルマ）: 主として Matisoff［2003］（STEDT）

- PLu（Proto-Luish: 東北インド・ビルマ）: 藤原［2012, 2014b］
- PNN（Proto-Northern Naga: 東北インド）: French［1983］（STEDT）
- PQ（Proto-Qiangic: 中国四川省）: STEDT
- PTani（Proto-Tani: 東北インド）: Sun［1993］（STEDT）
- PTB（Proto-Tibeto-Burman）: STEDT
- PTk（Proto-Tangkhulic: 東北インド）: Mortensen［2012b］（STEDT）
- Se（Sengmai: 東北インド）: McCulloch［1859］（表記を一部あらためた）
- STEDT（Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus）[注43]
- Ta（Taman: ビルマ）: Brown［1911］
- TB（Tibeto-Burman）: チベット・ビルマ語派への総称
- Tib（Tibetan: チベット）: Brown［1911］
- TL（Tai Long, Shan: ビルマ）: Sao Tern Moeng［1995］[注44]
- TN（Tai Naing: ビルマ）: 筆者による一次資料

附録 1: Brown［1911］によるタマン語

表記上の注意

- Brown［1911］に掲載される順番に番号をつけた。
- 次の順番で語彙を提示した:
  #番号 ‘意味 (English)’; Ta（タマン語形式）; TaL（Luce［1985］によるタマン語形式）; Brown［1911］にあがる比較形式（B, Tib, Kch, Kadu など）‖ ジンポー・ルイ語群の形式（PLu, C, K, G, J など）; PTB などの形式（主として STEDT による）
  なお、ここにあがる語形は、かならずしも同源形式ばかりではない。
- タマン語と同源形式と推定されるものについては、**bold** でしめした[注45]。
- Brown［1911］にあがる形式は *italic* でしめした。
- Brown［1911］または Luce［1985］の表記を次のようにあらためた: $p^{\text{‘}} \rightarrow p^{h}$,

注43 http://stedt.berkeley.edu/~stedt-cgi/rootcanal.pl（最終確認 2016 年 9 月 3 日）

注44 本稿では、SEAlang Library Shan Dictionary（http://www.sealang.net/shan/dictionary.htm : 最終確認 2016 年 9 月 19 日）でラテン文字表記されたものを使用した。

注45 頭子音や末子音よりも母音の対応を重視した。たとえば#23 ‘blood’ における PTani の形式は、頭子音だけをみればタマン語と対応しないけれども、母音まで考慮すると同源形式といえるので、**bold** でしめしている。また、全体でなく部分的な一致であっても、同源形式としてしめしている。たとえば#7 ‘seven’ については、チャック語やジンポー語の形式はほぼ全体がタマン語と同源形式であるけれども、PKC は接頭辞部分のみが同源形式であると推定される。

tʿ→ t^h, kʿ→ k^h, ś → s^h

- Brown［1911］による略号は次のようにあらためた: B. → B (Burmese), O.B. → OB (Old Burmese), Tib. → Tib (Tibetan), Kch. → Kch (Kachin/Jingpho), M → Me (Meithei), E. Naga → E Naga (Eastern Naga)
- 該当する語彙がないばあいには、‘—’ でしめした。
- シャン語からの借用語であるときには、PTB 以下の形式は省略した。
- 出典がしめされていない言語名の形式は、すべて STEDT による。
- 同形が他の項目にもみられる場合には、その旨を明記した。

1. ‘one’[注46]; Ta **tɔ**; TaL tə; Karen ***tö***, B *tit* ‖ PLu ***-a**, C **-a**, K **-a**, G **-a**, A/Se **-ta**, J lă^{55}ŋai^{51}; PTB ***ʔa** (STEDT #3540 provisional), PTani *kon, PKC *khat ≍ *ʔat ≍ *hat, PNN ***Ç-kla**^{A}, PCN *khaj, PTk *si, PBG *-sha^{4}, PLB *ʔ-dik^{L}, PKar ***t-la**^{T} (STEDT #7411)
2. ‘two’[注47]; Ta **nek**; TaL nek; B ***hnit***, Tib ***nyi*** ‖ PLu *kíŋ, C níŋ, K kléiŋ, G kɛ, A/Se kīng, J **ni^{33}**; PTB *g/s-**ni**-s (STEDT #2504), PTani —, PKC ***niʔ** ≍ *h**niʔ**, PNN *ʔ-**ni**, PCN *a-**ni(t)**, PTk ***ni**, PBG *[ki]^{4}**-niŋ**, PLB *ʔ-**nit** ≍ ***ni^{2}**, PKar *k-**hnej**^{A}
3. ‘three’; Ta **sùm**; TaL sum; B ***thon***, OB and Tib ***sum***, etc. ‖ PLu ***súm**, C **súŋ**, K **s^{h}óm**, G **s^{h}óm**, A/Se **shom**, J mă^{31}**sum^{33}**; PTB *g-**sum** (STEDT #2666), PTani ***ɦum**, PKC ***thum**, PNN *Ç-**sum**, PCN *a-**sam**, PTk ***t^{h}um**, PBG ***tham^{2}**, PLB ***sum^{2}**, PKar ***səm**^{A}
4. ‘four’; Ta **pəli**; TaL pəli; E Naga ***peli*** ‖ PLu ***prí**, C **prɨ́**, K **pí**, G **pí**, A/Se **pī**, J **mă^{31}li^{33}**; PTB ***b-ləy** (STEDT #2409), PTani ***pri**, PKC ***lii**, PNN ***bə ləy**, PCN ***phV-ləj**, PTk *ti, PBG ***Brɯi^{1}**, PLB ***b/ʔ-ləy^{2}**, PKar ***lwi**-t
5. ‘five’[注48]; Ta **məŋɔ**; TaL məŋə; Kch and Naga ***manga***, B and Tib ***nga*** ‖ PLu ***ŋá**, C **ŋá**, K hà, G hà, A/Se **nga**, J **mă^{31}ŋa^{33}**; PTB ***l/b-ŋa** (STEDT #1306), PTani ***ŋo**, PKC ***ŋaa**, PNN ***Ç-ŋa**^{B}, PCN ***pha-ŋa**, PTk ***ŋa**, PBG —, PLB ***ŋa^{2}**, PKar ***ŋjat**^{D}
6. ‘six’[注49]; Ta **kwa**; TaL kwɑ; Sengkadong Naga **k^{h}wɔ̀k^{h}ɐ**, Kadu *kok* ‖ PLu *k-ruk, C kruʔ, K houʔ, G houʔ, A/Se kok, J kʒu̱ʔ^{55}; PTB *d-k-ruk (STEDT #2621), PTani

---

注46 Ta と A/Se は同源形式。だが、A/Se が ‘CL-one’ であるのに対し、Ta は単に ‘one’ である。TaL の母音が ə なのは誤記。

注47 *i のあとで k が二次的に付加する例。

注48 ルイ語群の形式も Ta と同源。ただし、接頭辞 m-がある J や Naga のほうが Ta にちかい。K/G は Shan からの借用。TL haa^{3}。TaL の語末母音が ə なのは誤記。

注49 PTB *-uk vs. Ta -a は不規則な対応。K/G は Shan からの借用。TL hok^{4}。

*krə, PKC *ruk, PNN *d-ruk, PCN *t-ruk, PTk *ruk, PBG *Dok, PLB *C-krok^{L}, PKar *khrow^{A}

7. ‘seven’注50; Ta **sənè**; TaL səne; Kch ***sinit***, Naga ***seni***, etc., B ***kuhnit*** ‖ PLu ***s-ni**-ŋ, C **sənin**ŋ, K set, G sit, A/Se **sīnī**, J **sǎ^{31}nit^{31}**; PTB ***s-ni**-s (STEDT #2505), PTani *kV-**nɯt**, PKC ***sa**-riʔ, PNN *Ç-**nit**, PCN ***th-ni(t)**, PTk ***ni**, PBG ***[ni]^{4}**, PLB ***ʔnit** ≍ *ši^{2}, PKar ***hnət / hnwi-t**
8. ‘eight’注51; Ta **pəsè**; TaL pəse; Kch ***masat*** ‖ PLu ***cat** < ***ryat**, C **ʔácaiʔ**, K pɛt, G pɛt, A/Se **chat**, J **mǎ^{31}tsa̱t^{55}**; PTB ***b-r-gyat** ≍ ***b-g-ryat** (STEDT #2259), PTani *pri-ñi, PKC ***riat**, PNN ***Ç-gyat**, PCN —, PTk ***ʃɐt**, PBG —, PLB ***ʔ-rit^{L}**, PKar ***khrɔt^{D}/grɔt^{D}**
9. ‘nine’注52; Ta **təxɐ**; TaL tə̈xəː; Naga ***takhu***, Kch ***chaku*** ‖ PLu ***t-khúw**, C **təhvú**, K kàuʔ, G kɔ̀, A/Se **tuhu**, J **tʃǎ^{31}khu^{31}**; PTB ***d/s-kəw**, PCN ***t-ku** (STEDT #2364), PTani *kV-(n)aŋ, PKC ***kua**, PNN ***Ç-gəˑw**, PCN ***t-ku**, PTk ***ko**, PBG ***(kh)u^{1}**, PLB ***gəw^{2}**, PKar ***khwi^{A}**
10. ‘ten’注53; Ta **ʃi**; TaL ʃi; Kch ***shi***, Tib *chu*, B ***s^{h}è***, Kadu *shim* ‖ PLu ***cí** ∼ ***sí**; C **ɕí/jɨ́/sɨ́**, K ɕip, G s^{h}ip, A/Se shêt, **shī-**, **-jī**, J **ʃi^{33}**; PTB ***ts(y)i(y)** ∼ ***tsyay** (STEDT #2748), PTani *rjɯŋ, PKC *hraa, *soom, PNN *boˑn, *roˑk, PCN *th-ra, PTk *ra, PBG —, PLB ***tsay^{1}**, PKar ***chej^{A}**
11. ‘ape’注54; Ta **jùn**; TaL —; — ‖ PLu k-wóy, C kəvú, K kwɛ́, G kwɛ́; A koì, Se halca, J woi^{33}; PTB ***ywaŋ** (STEDT #6049), PTani *beː, PKC ***yooŋ**, PNN *woˑy, PCN *ŋa, PTk ***joŋ**, PBG —, PLB *myuk^{L}, PKar *joʔ^{D}
12. ‘arm, hand’; Ta **la**; TaL la; B ***let***, OB ***lak***, Kch *lata*, Tib ***lagpa*** ‖ ‘palm’ PLu ***tak**-prár, C **taʔ**práiŋ, K **taʔ**pá, G **taʔ**pá, A **t**akhu, Se **t**ahu, J lǎ^{31}**taʔ^{55}**; PTB ***lak** (STEDT #695), PTani ***lak**, PKC *kut ≍ *khut, *ɓaan, ***yak** ARMPIT, PNN ***glək**, PCN *khat, PTk *k^{h}ut, *paan, PBG ***yak**, PLB ***lak^{L}**, PKar —
13. ‘arrow’; Ta **p^{h}əlɔ**; TaL p^{h}əlɔ; — ‖ PLu —, C léjú, K təlèiʔʔus^{h}an, G mats^{h}a, A/Se mahol, J **pa̱^{55}la^{55}**; PTB ***g/b/m-la-y** (STEDT #2386), PTani *puk, PKC *thal, PNN ***la^{B}** dzaˑn, PCN ***la**ʔ BOW, PTk ***la**, PBG —, PLB *ʔ-dzan^{1}, PKar ***bla^{B}**

注50 K/G は Shan からの借用。TL cet^{4}。

注51 PTB/PLu *-at が Ta では e で対応するようである。K/G は Shan からの借用。TL piɛt^{2}。

注52 PTB *-əw vs. Ta -ɐ は規則的な対応（#66 ‘snake’）。接頭辞 t-はルイ語群、ナガ諸語、ヌン諸語にあり、ボロ・ガロ諸語にも散見される。K/G は Shan からの借用。TL kaw^{3}。

注53 K/G/A/Se は Shan からの借用。TL sip^{4}。

注54 Meithei yong, Maring (Naga) juŋ なども同源形式。

14. ‘axe’[注55]; Ta **wɔ***tùm*; TaL wɔtum; Atsi ***wa*** ‖ PLu —, C poʔtu, K páuʔs^{h}èiŋ, G pəs^{h}èiŋ, A/Se —, J niŋ^{31}**wa^{33}** ∼ n^{31}**wa^{33}**; PTB *r-**p^{w}a** (STEDT #2772), PTani —, PKC *hray, PNN *Ç-**wa^{A}**, PCN ***pu**, PTk ***hwa**, PBG *ru^{1}-a, PLB —, PKar —
15. ‘bag’[注56]; Ta **t^{h}ùm***bɔ*; TaL t^{h}umbə; Shan *htung* ‖ PLu ***thoŋ**(?), C dí̞ʔ, K ɕi**t^{h}áuŋ**, G s^{h}iʔ**t^{h}auŋ**, A/Se **thong**, J n^{55}phje^{51}
16. ‘bamboo’; Ta **wɔ**[注57]; TaL wɔ; B and Karen ***wa*** ‖ PLu *kro, C kro, K ləpouʔ, G təpàuʔ, A ko, Se k**oa**, J kă̰^{55}**wa^{55}**; PTB *r/g/s-**p^{w}a** (STEDT #2549), PTani *ɦəː, PKC *r**ua**, PNN *Ç-**wa^{B}**, PCN ***pwa**/pu, *r-hwaʔ, PTk ***hwa**, PBG ***bwa^{2}**, PLB ***wa^{2}**, PKar ***hwa^{B}**
17. ‘bat’[注58]; Ta *sɔɪŋ***p^{h}ula**; TaL sɔŋ-pulɑ; Yawyin ***wala*** ‖ PLu —, C laŋlúʔ, K ʔup^{h}aʔs^{h}a, G láŋnú, A/Se —, J **phăᵉᵉ**tsip^{55}; PTB ***ba:k** (STEDT #2146), PTani *pon, PKC ***paa-laak**, *ɓaak, PNN *Ç-**bak**, PCN —, PTk ***paak**, PBG *tao^{2}-**pak**, PLB —, PKar ***pla$^{A/B}$**
18. ‘bear’; Ta **s^{h}ap**; TaL s^{h}ap; Kch ***tsap*** ‖ PLu *k^{H}-**sap**, C lúwaiŋ, K kə**s^{h}àp**, G kə**s^{h}àp**, A/Se **sʌp**mo, J **tsap^{55}**; PTB *d-wam (STEDT #2777), PTani *tum, PKC *wom, PNN *C-**gyap**, PCN —, PTk *ŋom, *him, PBG *ma^{3}-phur, PLB *d-wam$^{1/2}$, PKar *tham^{A}
19. ‘bee’; Ta **ùùŋ**; TaL uiŋ; — ‖ PLu *t^{H}-Cún, C təlúŋ, K təmún ∼ túŋŋún, G təmún, A/Se —, J lă^{31}kat^{31}; PTB *s-b-**(r/y)aŋ** (STEDT #2788), PTani *ŋut^{2} HONEY BEE, PKC *khuay, PNN *Ç-guay, *C-na^{B}(guay), PCN *tʃhak, PTk *k^{h}oj, PBG —, PLB *bya^{2}, PKar *kwat^{D} BEE (APIS CERANA), *k-hne BEE (APIS DORSATA)
20. ‘big’[注59]; Ta **lwaŋ**; TaL lwɑŋ; Chin *len* ‖ PLu ***túŋ**, C búləliŋ, K **tóuŋ**, G **tóuŋ**, A/Se **tong**; PTB *ta-y (STEDT #2697), PTani *tə ∼ *ta, PKC *lian-II, lianʔ-II, PNN *g**luŋ**, PCN —, PTk *dej, *hak, PBG *DVr^{2}, PLB *k-ri(y)^{2}, PKar *ʔdo^{B}
21. ‘bird’[注60]; Ta *kə***tʃeksɔ**; TaL kətʃeksɔ (sparrow); Andro ***ujiksa***, Aimol (Old Kuki) ***kache*** ‖ PLu *u-**cík-sa**, C ʔusɨ, K ʔu**síʔs^{h}à** ∼ ʔu**siʔs^{h}â**, G ʔu**síʔs^{h}à**, A/Se u**jīksa**, J u^{31}[注61]; PTB *ʔu (STEDT #301), PTani *taŋ, PKC *waa, PNN *wa, *ua, *C-

注55 Chang の wo が同源形式とおもわれる。
注56 Shan からの借用語。TL t^{h}oŋ^{1}。
注57 #37 ‘father’ のひとつとは同源ではなく同音異義である。
注58 TaL は Ta にある有気音を無視している。
注59 頭子音が l-と t-とで対応していると推定される例。
注60 Ta の-*sɔ* は指小辞。#29 ‘cat’ にもある（倉部慶太氏の教示による）。PLu *-*sa* と同源。
注61 Jilí方言では *machik*［Brown 1837: 1033］（倉部慶太氏の教示による）。

waw, PCN *wa-**zaʔ**, PTk *wa, *ta, PBG *tao^{2}, PLB *s-ŋ(y)ak^{H}, PKar *tho^{B}

22. ‘bitter’; Ta **xɔ**; TaL xɔ; B **k^{h}ɑ**, Atsi ***hkaw*** ‖ PLu ***kha**, C **ha**, K **ha**, G **ha**, A/Se **ha**, J **kha^{55}**; PTB *b-**ka**-(n/m/ŋ) (STEDT #229), PTani *ko ～ ***kaː**, PKC ***khaa**-I, khaat ≍ khaak-II, PNN *C-**k^{h}a^{B}**, PCN *a-**kha**ʔ, PTk ***k^{h}a**, PBG ***kha^{2}**, PLB ***ka^{2}**, PKar ***kha^{B}**
23. ‘blood’; Ta **s^{h}e**; TaL s^{h}e; Kch ***sai***, Kadu ***se*** ‖ PLu ***se**, C **se**, K **s^{h}ɛ**, G **s^{h}e**, A/Se **shé**, J **sai^{31}**; PTB ***s-hywəy**-t (STEDT #230), PTani ***viː**, PKC ***thii**, PNN ***syi**, PCN *a-**(h)jəjʔ**, PTk ***ʃi**, PBG ***thɯi^{2}**, PLB ***swəy^{2}**, PKar ***swi^{B}**
24. ‘boat’注62; Ta **li**; TaL li; Kch ***li***, B ***hle*** etc ‖ PLu *hó, C hó, K h**əlí**, G **le**, A/Se ho, J **li^{33}**; PTB *m-**ləy** (STEDT #2413), PTani *si-pɯ, PKC *looŋ, PNN *loˈŋ, PCN *a-ruŋ, PTk *k^{h}oŋ, PBG *Ruŋ^{1}, PLB —, PKar *k**lej^{a}**
25. ‘body’注63; Ta **tu**; TaL tu; Shan ***tu*** ‖ PLu *san < sal, C kaiŋt^{h}a, K làŋ, G ko, A sʌmpon, Se sʌl, J **tu^{31}**sat^{31} ‘animal’; PTB ***du** (STEDT #14), PTani *ɯ, PKC *tak-shaa, PNN *ʔ-buˈm, PCN *a-maŋ, PTk —, PBG *han^{2}, PLB *guŋ^{1}, PKar —
26. ‘bone’; Ta **raŋ**; TaL raŋ; Kch ***nra*** ‖ PLu *ma(ŋ/k)-kV-k, C ʔámə**ra**, K maʔku, G maŋkuʔ, A/Se mangko, J n^{31}**ʒa^{33}**; PTB *g-**r**(w/y)**a**(**ŋ**/k) (STEDT #238), PTB *g-**ra**-t (STEDT #237), PTani *loŋ, PKC *ruʔ, PNN ***raˈŋ**, PCN *a-rut, PTk *ru, PBG *k**reŋ^{3}**, PLB *rəw^{2}, PKar *khrwit^{D}
27. ‘buffalo’注64; Ta **mɔk**; TaL mɔk (cattle); Kadu ***mok*** ‘cow’ ‖ ‘cattle’ PLu *s-**muk**; ‘cattle’ C sə**muʔ**, K **mouʔ**, G **mouʔ**, A s**ok**, Se ngo, J ŋa^{33}; PTB ***muk** CATTLE (STEDT #5607), PTani —, PKC *sial, *naa BUFFALO, PNN *teˈk, PCN —, PTk ***muk** CATTLE, PBG *ma^{4}-su COW, PLB *kway^{2}［Bradley 1979 #8C］, PKar *p/b-na^{B}
28. ‘call’注65; Ta *lu*; TaL —; — ‖ PLu *(k)o, C ʔo, K kɔ, G kɔ, A/Se hak, J kau^{33}; PTB *(g/k)aw (STEDT #2235), PTB *r-yuw ASK/REQUEST (STEDT #2799), PTani *grok, PKC *kaw, PNN *ŋyek, PCN *tsaj, PTk *ho, PBG —, PLB *graw^{1}, PKar —
29. ‘cat’注66; Ta **mətʃeksɔ**; TaL mətʃeksɔ; E Naga ***mashi*** ‖ PLu *hál-**ci-k**, C háiŋ, K

注62 K の形式は PLu *hó が弱化したものが、PTB *m-ləy に由来する lí に付加した形式であると推定される（査読者 B の指摘による）。G は B からの借用。

注63 STEDT によると、PTB の形式がタイ諸語と関連している。TL to^{1}。なお、J は TL *to^{1}s^{h}at^{4}* からの借用語（倉部慶太氏の教示による）。

注64 Ta のみ ‘buffalo’ であり、他言語の同源形式はいずれも ‘cattle’。

注65 Ta に対して適当な同源形式がみあたらない。PTB *r-yuw は頭子音があわない。

注66 Ta の接頭辞は、PTB や PTani、PNN、PTk、PBG と関係するとともに、猫の鳴き声と関

han**ɕî**, G hán**sìʔ**, A hʌn**gg**en, Se hʌl**jīk**; PTB *m/s/-rwaŋ, PTani *mjo TIGER, PKC —, PNN *miaŋ, PCN —, PTk *mi, PBG *mVŋ^{4}-kV, PLB *k-roŋ^{1}, PKar *thu^{B} CIVET CAT

30. ‘cold’; Ta **xɑm**; TaL xɑːm ‖ PLu ***sim**, C **siŋ**, K **ɕim**, G **s^{h}im**, A **kan**, Se kadeng, J **khjen^{33}** ‘snow’; PTB ***kyam** (STEDT #2374), PTani ***han** COLD (WATER), PKC *shik, *wot, PNN ***k^{h}yəm**, PCN *a-tshak, PTk *sik, *kow, PBG *sV^{4}**[k]am**, PLB *ʔ-klak^{H} ≍ *m-klak^{H}, PKar —
31. ‘dog’; Ta **vi**; TaL vi; Chin ***ui***, ***wi*** ‖ PLu ***kuy**, C **kvu**, K **ci**, G **ci**, A/Se **kī**, J **kui^{31}**; PTB *d-**kwəy**-n (STEDT #1764), PTani ***kwi**, PKC ***ʔuy**, PNN ***kuəy** (kreˑŋ), PCN ***khjəj**, PTk ***hwɨ**, PBG —, PLB ***k^{w}əy^{2}**, PKar ***thwi^{B}**, *thwiʔ
32. ‘ear’[注67]; Ta **nə***p^{h}a*; TaL nəp^{h}ɑː; B and Tib ***na***, Yawyin ***napaw***, Sopvoma (Naga-Kuki) *nubbi* ‖ PLu *k-**ná**, C ʔakə**ná**, K kə**ná**, G kə**ná**, A/Se ka**na**, J **na^{33}**; PTB *r/g-**na** (STEDT #811), PTani ***ña**-ruŋ, PKC ***naa** ≍ *h**naa**, PNN ***na^{A}**, PCN ***hna**ʔ, PTk ***na**, PBG ***na$^{[1]}$**-cur, PLB *ʔ-**na^{2}**, PKar ***na^{B}**
33. ‘earth (soil)’[注68]; Ta *pə***kɔ**; TaL pəkɔ; — ‖ PLu ***ka**, C **kə**jáʔ, K **ka**, G **ka**, A/Se **ka**, J **ka^{55}**; PTB *r-**ka** (STEDT #2284), PTani *mroŋ, PKC *lay, PNN ***ka^{B}**(tok), *pit, PCN *a-lej, PTk *lej, PBG ***ha^{2}**, PLB —, PKar —
34. ‘eat’[注69]; Ta **sɔ**; TaL —; B and Tib ***sa***, Kch ***sha*** ‖ PLu ***sa**, C **sa**, K youʔ, G youʔ, A **sha**, Se **sa**, J **ʃa^{55}**; PTB ***dz(y)a**-k/n/t/s (STEDT #36), PTani *do, PKC *ʔay, PNN ***dza^{B}**, PCN ***tsa**ʔ, PTk ***tsa**, PBG ***ca^{2}**, PLB ***dža^{2}**, PKar *ʔam^{B}
35. ‘elephant’; Ta **məki**; TaL məki; Kch ***măgwi***, Kadu ***akyi*** ‖ PLu ***kúy**, C ʔu**kvú** ∼ wvu**kvú**, K ʔə**cí**, G ʔə**cí**, A/Se **kī**, J **mă^{31}kui^{33}**; PTB ***m-gwi(y)** (STEDT #2257), PTani —, PKC *ɓuy ≍ *wuy, *saay, PNN *loˑk, *C-glaˑŋ, PCN —, PTk *m-pu, PBG —, PLB *tsaŋ, ʔ-ya^{3}, PKar *k-chaŋ^{A}
36. ‘eye’[注70]; Ta **pek***kwe*; TaL pəkkwe; — ‖ PLu ***mík**, C ʔa**míʔ**, K **míʔ**tù, G **míʔ**tù,

係しているかもしれない（査読者 B の指摘による）。Ta の主音節は G や Se とやや類似する。ただし、K の語末に閉鎖音がないことを考慮すると、G や Se の語末子音は高母音のあとで二次的に付加したものとおもわれる。ほか、Ta の形式と類似するものには Ao Naga (Chungli) si^{3}tsək^{3} ‘wild cat’ が確認される。

注67 Ta の接頭辞部分は TB に広範に分布する形式。主音節部分は、STEDT によると PTB *r-pak LEAF/LEAFLIKE PART/FLAT OBJECT (STEDT #821) と同源形式。

注68 Ta pə-は Rawang ba［LaPolla & Sangdong 2015: 10］と関係しているとおもわれる。

注69 PTB の形式は TB で広範に分布する。しかしルイ語群の形式とは対応が不規則。Ta の形式は、ほかの TB の形式よりは、ルイ語群の形式に類似する。ただし、新資料によると ‘eat’ は cɔ のように発音されることもあり、むしろ PTB と同源ということになる。

注70 pek は PTB *s-mik と関係する。祖形の*m が Ta では p で対応する平行例に#51 ‘house’

A/Se **mīt**, J **mjiʔ**^{31}; PTB *s-**mik** (STEDT #682), PTani ***mik**, PKC ***mik**, PNN ***me·k**, ***mik**, PCN ***mjak** ≍ *h**mik**, PTk ***mik**, **mit**, PBG ***muɯk**-kon, PLB *s-**myak**, PKar ***mɛʔ**^{D}

37. ‘father’[注71]; Ta **vɔ** ∼ **wɔ**; TaL vɔ ∼ wɔ; Kch, E Naga and Garo ***wa***, Kadu ***awa*** ‖ PLu *a-**wá** (?); C ʔa**vá**, K ʔə**wà**, G ʔə**wa**, A a**pa**, Se a**po**, J **wa̱**^{51}; PTB ***wa** (STEDT #5484) ≍ ***p**^{w}**a** (STEDT #2546), PTani ***bo**, PKC ***paa**, PNN ***pwa**^{A}, PCN *a-**pwaʔ**, PTk ***ba**, PBG ***pha**^{1}, PLB *ʔə**pa**^{3}［Bradley 1979 #201］, PKar ***pha**^{A}

38. ‘female’; Ta **nëm**[注72]; TaL nëm; Kch ***num*** ‖ ‘daughter-in-law’ PLu *nám; C ʔanáŋ, K nám, G nám, A/Se —, J na̱m^{33}, **num**^{33} ‘woman’; PTB *s-nam DAUGHTER-IN-LAW / WIFE / SISTER (STEDT #2486), *n(y)u FEMALE / MOTHER (STEDT #1621), PTani *nə, PKC *nuu, PNN *ɲə·w MOTHER, PCN *la, PTk *la DAUGHTER, PBG —, PLB *mi$^{2/3}$, PKar *hmɨ^{B}

39. ‘fire’[注73]; Ta **vè**; TaL ve; Shan *fi*, Kachari ***wai***, Kch and Kadu ***wan*** ‖ PLu ***wan** < ***wal**, C **vaiŋ**, K **wan**, G **wan**, A/Se **wal**, J **wan**^{31}; PTB *b^{w}ar ≍ *p^{w}ar (STEDT #2152), PTB *mey (STEDT #2136), PTani *mə, PKC *may, PNN *ʔ-wə·r, PCN *mej(ʔ), PTk *mej, PBG *bwar^{2}, PLB *s/ʔ-mey^{A}, PKar *hme^{B}

40. ‘fish’[注74]; Ta **ətsɔ**; TaL ətsɔ; — ‖ PLu *t^{H}-ŋa, C təna, K táŋŋà ∼ taŋŋâ, G táŋŋà, A/Se tanga, J ŋa^{55}; PTB —, PTani *ŋo, PKC *ŋaa ≍ *hŋaa, PNN *ŋya^{B}, PCN *a-hŋaʔ, PTk *ŋa, PBG *na^{2}, PLB *ŋa^{2}, PKar *daʔ^{D}

41. ‘flesh’[注75]; Ta **hè**; TaL he; Shan *ha* ‖ ‘body/flesh/meat’ PLu ***san** < ***sal**, C ʔá**saiŋ**, K **s^{h}əlan**, G **s^{h}əlan**, A ak**sʌl**, Se sen ‘flesh’, **sal** ‘body’, J **ʃan**^{31}; PTB ***sya-n** (STEDT #34), PTani *jak, PKC ***s^{h}aa**, PNN *me·y, *p^{h}ay, ***swun**, *wur, PCN *a-**ʃaʔ**, PTk ***sa**, PBG —, PLB ***xa**^{2} ‘meat’［Bradley 1979 #135］, PKar *hŋa^{B}

42. ‘give’[注76]; Ta **nëm**; TaL nëm; — ‖ PLu *i, C ʔi, K ʔi, G ʔi, A/Se ī, J ja^{33}; PTB

がある。ルイ語群では K p と G m が対応する例があり、祖形に入破音を再構しうる。しかし、この語例では K も G も m で対応し、祖形に入破音を再構できない。なお、注37も参照。

注71 STEDT には E Naga と Garo に *wa* という形式がない。古形かもしれない。

注72 #42 ‘give’ とは同源ではなく同音異義である。

注73 PLu *-al に Ta -è が対応する並行例に#41 ‘flesh’ がある。

注74 Ta の形式は、PQ *r-**dzwa** (STEDT #5673) に類似する。

注75 PLu *-al に Ta -è が対応する並行例に#39 ‘fire’ がある。ただし、この語例は頭子音が PTB や PLu などと対応しない。

注76 Ta と類似する例として Chairel **num** がある。なお、#38 ‘female’ とは同源ではなく同音異義である。

*ya-k (STED #3549), PTani *bi, PKC *pia-I, piak-II, PNN *C-la^{B}, *gow, *p^{h}a, PCN —, PTk *mi, PBG *ron^{2}, PLB *bəy^{2}, PKar —

43. ‘go’; Ta **hɔ**; TaL hɔ; — ‖ ‘walk/bring’ PLu ***ha**; C **ha**, K **ha**, G **ha**, A la**ha** ‘bring’, shai ‘walk’, Se la **ha** ‘bring’, sa ‘walk’, J sa^{33} ‘go/come’; PTB s-wa BE IN MOTION, GO, COME (STEDT #2774), PTani *in, PKC *kal, *θeʔ, PNN *ga^{A}, PCN *wa, PTk *wa, PBG —, PLB *ʔay^{1}, PKar *lwɛ^{A}

44. ‘gold’[注77]; Ta **xɑm**; TaL xɑːm; Siyin and E Naga ***kham***, Shan *ka*, Chinese *kin* ‖ PLu —, C ʃwe, K ŋón, G ɕwe, A/Se kʌngtunong, J tʃa^{31}

45. ‘good’[注78]; Ta *kə***më**; TaL kəmë; Shan *hkam* ‖ PLu ***méy**, C **mí**, K **mɛ́**, G **mé**, A/Se —, J **mai^{33}**; PTB ***mway** BEAUTIFUL (STEDT #2457), PTani *kaŋ-pro BEAUTIFUL, PKC ***mooy** BEAUTIFUL, PNN ***ma˙y**, PCN —, PTk *p^{h}ra, PBG *nam, PLB *ʔ-na^{1}, *m-d(y)ak, PKar —

46. ‘grass’; Ta **s^{h}èiŋ**; TaL s^{h}eŋ; Kch ***tsing*** ‖ ‘live’ PLu ***séŋ**(ʔ) < ***syáŋ**(ʔ), C **síŋ**, K **s^{h}èiŋ** ∼ ʔə**s^{h}èiŋ**, G **s^{h}áiŋ**, A **seng**, Se **sheng**, J **tsi̱ŋ^{33}** ‘grass’; PTB ***s-riŋ** ≋ ***s-r(y)aŋ** LIVE/ALIVE/GREEN/RAW/GIVE BIRTH (STEDT #71), PTani —, PKC ***hriŋ**-I, hrin-II ALIVE, PNN *Ç-**criŋ**, PCN *a-ʒa(ʔ), PTk ***hriŋ** ALIVE, PBG *sam^{1}, *thaŋ^{1} ALIVE, PLB ***tsiŋ^{2}** LIVE, PKar —

47. ‘head’; Ta *kə***kɛ**; TaL kəkəː; Me ***kok***, Tib ***go*** ‖ PLu ***hów** < ***khów**, C ʔa**hú**, K hə**l**áŋ, G hə**l**áŋ̊ŋù̊ʔ, A/Se hurʌng, J khaʔ^{31}**khu^{55}** ‘upstream’; PTB *m/s-**gaw** (STEDT #386), PTani *dum, PKC *luu, PNN ***k^{h}ow**, PCN ***ku**, PTk ***kow**, PBG ***kho^{4}**-rok, PLB *ʔu^{2}, PKar *kləʔ^{D}

48. ‘hill’; Ta **kɔùŋ***rwe*; TaL kɔʊŋrwe; Kch ***kawng***, Tib *ri* ‖ ‘mountain’ PLu —, C təgó, K kəya, G s^{h}eiʔ, A/Se **kon**tak, J **ko̱ŋ^{31}** ‘hill’; PTB *s-gaŋ (STEDT #3581), PTani *di, PKC *mual, *klaaŋ, PNN *C-**ko˙ŋ**, PCN —, PTk *p^{h}uŋ, PBG *ha^{2}-cu, PLB *kaŋ^{1}［Bradley 1979 #312］, PKar —

49. ‘hog’; Ta **va** ∼ **wa**; TaL va ∼ wa (pig); Kch ***wa***, B ***wet***, OB ***wak***, Kadu ***wag*** ‖

注77 Ta はシャン語からの借用。TL k^{h}am^{4} を借用している TB は散見される。たとえば、Tiddim kham^{3}, Nocte kam, Pyen kham^{31}, Proto-Loloish *kam^{21}, Pa-O khām などがある。またジンポー語にも khám ‘gold leaf’ という形式で借用されている（倉部慶太氏の教示による）。なお、Brown［1911］によるシャン語 *ka* は、‘go’ をあらわす kwaa^{2} を意図している可能性がある。本来は#43 ‘go’ であげるべきところ、まちがって ‘gold’ にあげていると推定される。なぜなら、次例の ‘good’ に対して、‘gold’ を意味するシャン語をあげているからである。

注78 Brown［1911］によるシャン語の *hkam* は ‘gold’ を意味する。本来は#44 ‘gold’ に対してあげるべきものである。

'pig' PLu *wak, C **vaʔ**, K **waʔ**, G **waʔ**, A/Se **wak**, J **waʔ**^{31}; PTB *p^{w}**ak** (STEDT #1006), PTani *rjek, PKC ***wok**, PNN ***wak**, PCN —, PTk ***hwok**, PBG ***bwak**, PLB ***wak**^{L}, PKar *thɔʔ^{D}

50. 'horse'[注79]; Ta *tʃ**ipòùk***; TaL tʃipɔʊk; Siyin ***shipu***, Maring Naga ***sapuk***, Kadu ***sabu*** ‖ PLu *s^{H}-**pu-k**, C mərə́ŋ, K s^{h}ə**pù**, G s^{h}ə**pùʔ**, A/Se shuruk; J kum^{31}ʒa^{31}; PTB *s/m-raŋ (STEDT #1431), PTani *kɯ < Indo-Aryan, PKC *raŋ, PNN *koˈy, PCN —, PTk *kol < Indo-Aryan, PBG —, PLB *mraŋ^{2}, PKar *k-sre^{T}
51. 'house'[注80]; Ta **ʃìp**; TaL ʃɪp; Tangkhul Naga ***shim*** ‖ PLu ***kím**, C **kíŋ**, K **cém**, G **cím** ∼ **kím**, A/Se **kem**; PTB ***k-y(i/u)m** (STEDT #1612), PTani —, PKC ***ʔim**, PNN ***kium**, PCN ***a-jam**, PTk ***ʃim**, PBG *nok, PLB ***yim**^{1}, PKar —
52. 'I'[注81]; Ta **në**; TaL në; B ***nga*** ‖ PLu ***ŋa**, C **ŋa**, K **ŋa**, G **ŋa**, A/Se **nga**, J **ŋai**^{33}; PTB ***ŋa-y** ≋ ***ka** (STEDT #2530), PTani ***ŋo**, PKC ***kay** ≋ ***kay**-maʔ, PNN ***ŋa**^{A}, PCN ***aj**, PTk *ʔi 1ST PERSON, PBG ***aŋ**^{1}, PLB *C-**ŋa**^{1}［Bradley 1979 #438］, PKar —
53. 'iron'[注82]; Ta **ʃa**; TaL ʃa; Tib ***chag***, Garo *ser*, Kadu *sin* ‖ PLu *sen < *selʔ, C siŋ, K s^{h}en, G s^{h}ɛn, A sên, Se sél; PTB *l-**tsyak** (STEDT #6365 provisional), PTani —, PKC *thiir, PNN *yaˈn, PCN *jən, PTk *t^{h}ur, *ri, PBG *sɯr^{1}, PLB *xam^{1}［Bradley 1979 #403］, PKar ***thaʔ**^{D}
54. 'kill'; Ta **səs^{h}èùk**; TaL —; Kch and OB ***sat*** ‖ PLu *—, C kə**ɗaiʔ**, K tánɕí, G kaps^{h}í, A ca-si, Se kʌp-sī, J **sat**^{31}; PTB *g/b-**sat** (STEDT #1018), PTani *man, PKC ***that**-I, ***thaʔ**-II, PNN *ʔ-**sot**, PCN —, PTk ***t^{h}at**, PBG —, PLB *C-**sat**, PKar —
55. 'know'; Ta *tʃùp*[注83]; TaL —; — ‖ PLu *—, C ʃé, K míŋs^{h}əhà, G míŋŋ̊ò, A isa, Se iksha, J tʃe̞^{33}; PTB *syey-s (STEDT #2670), *m-kya(ŋ/n) (STEDT #1229), PTani *ken, PKC *thay-I, *thayʔ-II, PNN *C-k^{h}eŋ, *C-yəˈy, PCN *m-thət, PTk *t^{h}ej, PBG *si^{4}, PLB *šey$^{2/3}$, PKar —

注79 ビルマ・アラカン州の Sak として Hodgson［1853: 5］には sapú が記録されている。Ta や G の形式は、高母音のあとで閉鎖音が付加しているものと推定される。

注80 祖形の*m が Ta では p で対応する平行例として#36 'eye' がある。

注81 TB で広範に分布する頭子音は ŋ-である一方、Ta では n-である点が特異である。n-で対応するものは、東北インドではなされる Ao (Chungli) ni、Sema (Naga) ni、Mikir ne などがある。以下追記: いずれも前舌母音をもつ。

注82 Ta -a < PTB *-ak なので、PTB *l-tsyak が同源と推定される。PTB *syaːl ≋ *syiːr (STEDT #2673) は、母音の対応に難点がある。

注83 適当な同源形式が確認できない。追記。

56. ‘man (human being)’[注84]; Ta **mek**; TaL mek; Tib, Shonshe Chin and E Naga ***mi***; PL*C^{H}-tik-(sa), C lú, K tə**mì**s^{h}a, G tìʔs^{h}a, A tīksahora, Se tīkhora, J mă^{31}ʃa^{31}; PTB *r-**mi(y)**-n (STEDT #1002), PTani ***mi**, PKC ***mii**, PNN *C-**məy**, PCN *a-[h]**məjʔ**, PTk ***mi**, PBG *mV^{4}-Sa, PLB —, PKar *khwa^{A}
57. ‘male’[注85]; Ta **laktʃaŋ**; TaL lɑk tʃaŋ;— ‖ PLu *-la; C -la, K -la, G -la, A/Se —, J la^{33}; PTB la (STEDT #1624), PTani —, PKC *paa, PNN *la^{A}, *la^{B}, PCN *puŋ MALE (OF ANIMALS), PTk *ba, PBG *mV^{4}-Sa, PLB *ʔ-pa^{2}［Bradley 1979 #173］, PKar *khwa^{A}; TL **luk^{3}tsaaj^{4}** ‘male child’
58. ‘moon’[注86]; Ta **sə̆lɔ**; TaL sə̆lɔ; Lushai ***thla***, B and Karen ***la***, Kadu ***sada*** ‖ PLu ***s-dá** < ***s-lá**, C **sə̆dá**, K **s^{h}ə̆tá**, G **s^{h}ə̆tá**, A/Se **satha**, J **ʃă^{33}ta̱^{33}**; PTB ***s-(g)la** (STEDT #1016), PTani *po-**lo**, PKC ***khlaa**, PNN ***gla** poy, PCN —, PTk *caaŋ, PBG —, PLB ***s/ʔ-la^{3}**, PKar ***ʔla^{A}**
59. ‘mother’[注87]; Ta *nëm*; TaL nëm; Kch *mu*
60. ‘name’[注88]; Ta **tə̆meŋ**; TaL tə̆meŋ; Me ***ming***, Thādo (Chin) ***min*** ‖ PLu *—, C ʔa**míŋ**, K namɛ, G naŋmi∼naŋmɛ, A/Se —, J **mjiŋ^{33}**; PTB ***r-mi(ŋ/n)** (STEDT #2450), PTani ***mɯn** ∼ *mrɯŋ, PKC ***miŋ** ≋ ***hmiŋ**, ***min** ≋ ***hmin**, PNN ***min**, PCN ***a-miŋ**, PTk ***miŋ**, PBG ***mɯŋ^{1}**, PLB ***ʔ-miŋ$^{1/3}$**, PKar ***min^{A}**
61. ‘night’[注89]; Ta **nɑtaŋ**; TaL nɑːtaŋ; Kadu ***nat**kyet* ‖ PLu ***nak**, C **naʔtaiʔ**, K **naʔ**cɛ, G **naŋ**ki, A/Se sa**nʌk**, J ʃă^{31}**naʔ^{55}**; PTB *s-**nak** BLACK (STEDT #2483), PTani *jo, PKC ***nak** BLACK, PNN *C-**ɲak** BLACK, PCN *a-**njak** BLACK, PTk *ja, PBG *phwar^{1}, PLB *s-**nak^{H}**, PKar —
62. ‘river’[注90]; Ta ‘word for water used’; TaL —

注84 *i のあとで k が二次的に付加する例。

注85 ルイ語群や J の形式は「おんどり」の接尾辞として確認される。Ta はシャン語からの借用語と推定される。なおシャン語の-aaj が-ŋ をともなって借用される現象は、K にも確認される: ‘rabbit’ K páŋtáiŋ < TL paaŋ^{1}taaj^{4}

注86 注33 を参照。

注87 #38 ‘female’ とおなじ単語。なお Kch (J) に *mu* という形式は確認されていない（倉部慶太氏の教示による）。

注88 TB で広範に分布する形式。ただし、接頭辞 t-を共有するのは中央ナガ諸語とギャロン諸語の一部にかぎられるようである。

注89 Ta の形式は ‘night’（PLu *nak）と ‘dark’（PLu *tháŋ）が複合した形式かもしれない: ‘dark’ PLu ***tháŋ**, C **t^{h}áŋ**, K **t^{h}áŋ**, G **t^{h}áŋ**, A mīt **tang**(?) ‘blind’, Se —, J **tʃa̱ŋ^{33}** ‘black’; PTB ***tsya(k/ŋ)** (STEDT #2683)

注90 #73 ‘water’ と同形式がもちいられる。この点はジンポー語とも共通する（倉部慶太氏の教示による）。

63. ‘road’; Ta **lam**; TaL lam; B, Kadu, Tib etc ***lam*** ‖ PLu *__lám__, C **láŋ**, K **lám**, G **lám**, A **lam** je ‘far’, Se **lam** ja ‘far’, J **lam**^{33}; PTB *__lam__ (STEDT #1017), PTani *__lam__, PKC *__lam__, PNN *__ləm__, PCN *__laːm__, PTk *ʃoŋ, PBG *__lam__^{1}, PLB *ʔə__lam__^{3} ‘where’［Bradley 1979 #433］, PKar —
64. ‘rock’[注91]; Ta **taŋpɔ**; TaL taŋpɔ (stone); — ‖ ‘stone’ PLu *__t__^{H}__-luŋ__, C **təluŋ**, K **tə**l**ouŋ**ɕîŋ, G **tə**l**àuŋ**, A/Se **torong**, J **n**^{31}**luŋ**^{31}; PTB *__r-luŋ__ STONE (STEDT #1269), PTani *__lɯŋ__, PKC *__luŋ__, PNN *__C-luŋ__, PCN *__luŋ__, PTk *__luŋ__, PBG *__loŋ__^{2}, PLB *k-lok ≍ *__k-loŋ__, PKar *__loŋ__^{B}
65. ‘salt’; Ta **tsùm**; TaL tsum; Kch ***jum***, Kadu ***sum***, Me ***thum*** ‖ PLu *__cɨm__(?) < *__ryum__(?), C **cɨŋ**, K **sum**, G **sum**, A/Se **chum**, J **tʃum**^{31}; PTB *__g-ryum__ (STEDT #2644), PTani *lo, PKC *tsii, PNN *__cuˑm__, PCN *maj, PTk *ci, PBG *__sɯm__^{3}, PLB —, PKar *sa^{B}
66. ‘snake’[注92]; Ta **pɐ**; TaL pəː; Kadu *kap*^{h}***u*** ‖ PLu *k-__phúw__, C kə__hvú__, K kə__p__^{h}__ú__, G kə__p__^{h}__ú__, A/Se ku__phu__, J lă^{33}__pu̱__^{33}; PTB *__bəw__ (STEDT #2178), PTani *__bɯ__, PKC *ruul, PNN *__ʔ-bəw__, PCN *__ph__-rə, PTk *ruul, PBG *cu^{4}-__pu__, PLB *__bəw__^{2}, PKar *row^{B}
67. ‘silk’[注93]; Ta **nè**; TaL —; Shan *lai* or ***nai***, Kch *lai* ‖ PLu —, C púrɨ, K —, G pót^{h}ɛ̀ (< WrB), A/Se —, J lai^{33}
68. ‘speak’[注94]; Ta **t**^{h}**è**; TaL —; Atsi *dai*, B *tè* (particle), Kadu *tutabauk* ‖ PLu *—, C prɨ, K təpáuʔ, G təpáuʔ, A/Se na, J tsu̱n^{33}; PTB —, PTani *(b/m)an, PKC —, PNN *t^{h}uˑŋ, PCN —, PTk —, PBG —, PLB —, PKar —
69. ‘star’[注95]; Ta *taŋ***pɐ**; TaL taŋpəː; — ‖ PLu *s-kán-si < *s-kár-si(?), C səkáiŋsɨ, K ʔuluɕi, G ʔunuŋs^{h}i, A/Se sangʌnsī, J ʃă^{33}kan^{33}; PTB *s-kar (STEDT #2300), PTani *kar, PKC *ʔaar-θii ≍ *-sii, PNN *dzi, PCN —, PTk *ra, *la, PBG *[ha^{4}-tV-khi], PLB *ʔ-grəy^{1}, PKar *cha^{B}
70. ‘steal’[注96]; Ta **xɐ***lɔ*; TaL xəːlɔ; B ***k***^{h}***o***\ ‖ PLu *__kuw__-k, C **kvu**, K **ku**, G **kuʔ**, A/Se

---

注91 #69 ‘star’ と同一形式であり、本来は taŋpɐ であると推定される。TB のなかでは Sulung kə^{33}pɔ^{ɪ33} が類似する。

注92 PTB *-əw が Ta -ɐ で対応するのは規則的（#9 ‘nine’）。

注93 注27 を参照。

注94 Ta は Dimasa **thi** と同源形式であるようにおもわれる。

注95 Ta の-pɐ は PTB *__pu__ BALL (STEDT #1275) と同源形式と推定される。#64 ‘rock’ にみられる-pɔ も、「まるいもの」という意味と関連しており、本来は-pɐ であった可能性がある。つまり、Ta の ‘rock’ と ‘star’ は同一であるとおもわれる。

注96 Ta の形式は PTB *r-kəw に、PLu *la ‘take’ がついた形式ではないかとおもわれる。

kuk, J lǎ^{31}**ku^{55}**; PTB *r-**kəw** ≋ ***hu** (STEDT #2365), PTani *pjoŋ, PKC *m-ruːk, PNN *Ç-**kə˙w**, PCN *a-**hu**, PTk *li, PBG —, PLB ***kəw^{2}**, PKar ***how^{B}**

71. ‘sun’[注97]; Ta *pu***pek**; TaL pupek; Kadu ***samet*** ‖ PLu *c-**mík**, C cə**mí?**, K sə**mí?**, G sə**mí?**, A/Se cha**mīt**, J tʃan^{33}; PTB *tsyar (STEDT #2753), PTani *ñi, PKC *nii, PNN *cər, PCN *nəj, PTk —, PBG *sal^{1}, PLB *?nəy$^{1/3}$, PKar *mɨ^{B}

72. ‘tooth’[注98]; Ta **vɑ***kòùn*, **wɑ***kòùn*; TaL vɑːkɔʊn, wɑːkɔʊn; Garo ***wa****gam*, E Naga ***va***, Kch ***wa*** ‖ PLu *s-**wá**, C ?asə**vá**, K s^{h}**wá**, G s^{h}**wá**, A sh**o**, Se sh**oa**, J **wa^{33}**; PTB *s/p-**wa** (STEDT #632), PTani ***fiː**, PKC ***haa**, PNN *s**wa^{B}**, PCN *p-**hwa**, PTk ***ha**, PBG ***phwa^{1}**-Gam, PLB *s**wa^{2}**, PKar —

73. ‘water’; Ta **t^{h}i**_; TaL t^{h}i; Chin ***ti***, ***tui***, Garo and E Naga ***ti***, Karen ***hti***, Tib *ch’u* ‖ PLu *wé, C vé ‘rain (v)’, K wɛ́, G wé, A/Se mè, A okwe ‘gravy’, J n^{31}tsi̱n^{33}; PTB *rəy (STEDT #1013), *m-**t(w)əy**-n ≋ *m-**ti**-s (STEDT #298), PTani *si, PKC ***tuy**, PNN ***təy**, PCN *rwa/ru, *a-tʃə, *ki, PTk ***di**, PBG ***tɯi^{1}**, PLB *rəy^{1}, PKar ***thej^{A}**

74. ‘write’[注99]; Ta **rek**; TaL —; B ***ye***\, OB ***re***\, Hindustani *likh* ‖ PLu *—, C rwé, K ?əc^{h}ìn, k^{h}ù, G yé, A/Se —; PTB *b-**rəy** DRAW/MARK/BOUNDARY (STEDT #2616), PTani *fat^{1}, PKC —, PNN —, PCN *a-**rəj?** BOUNDARY, BORDER, PTk —, PBG —, PLB ***rəy$^{1/3}$**, PKar —

75. ‘year’[注100]; Ta *kèìŋ*; TaL —; Chin *kun* ‖ PLu *niŋ, C səniŋ, K yàʔniŋ ‘this year’, G yəniŋ pí ‘this year’, A/Se kum, J ʃǎ^{31}niŋ^{33}; PTB *s-ni(ː)ŋ ≋ *s-nik (STEDT #2501), *kum (STEDT #6165 provisional), PTani *ñiŋ, PKC *kum, PNN *pa˙ŋ, PCN *niŋ, *a-kam, PTk *kum, PBG *kha^{4}-lV LAST YEAR, PLB *s-nik^{H}［Bradley 1979 #477A］, *C-kok^{L}［Bradley 1979 #477B］, PKar *hneŋ^{B}

注97 注37を参照。

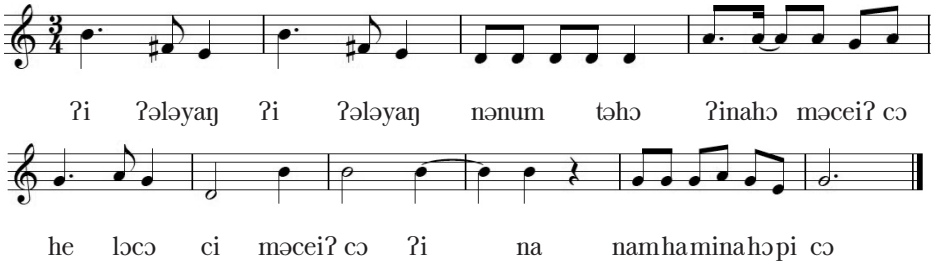
注98 Ta -kòùn は、TL k^{h}ew^{3} ‘teeth’ が関係しているかもしれない。

注99 *i のあとで k が二次的に付加する例。‘write’ は OB *riy* である［Nishi 1999: 39］。なお、C はマルマ語、G はビルマ語からの借用語。

注100 Ta との同源形式が未確認である。

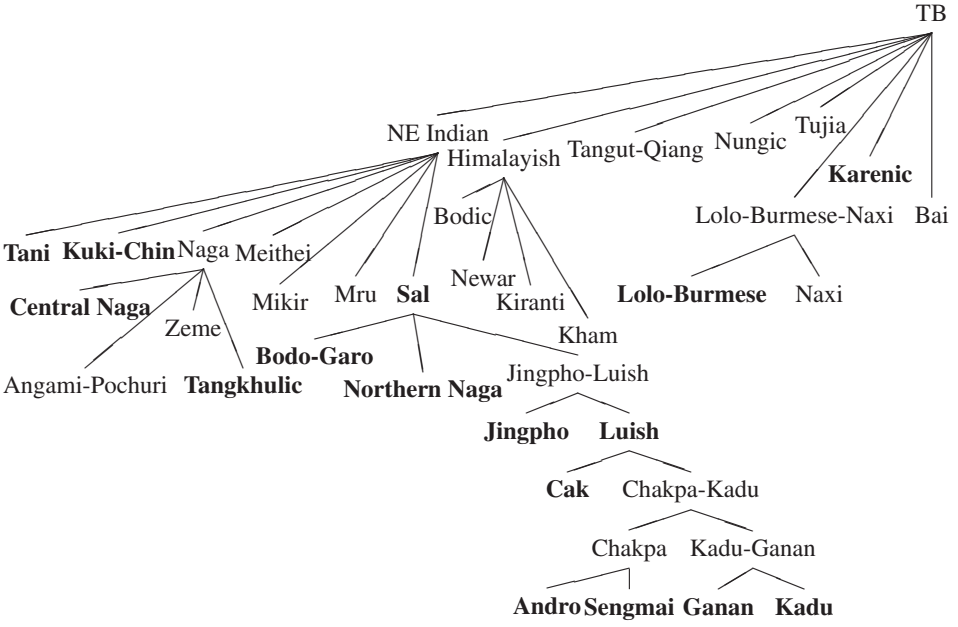
附録 2: 新資料の歌

次にあげるものは、(32) でしめしたタマン語の歌の譜面である[注101]。



附録 3: TB 系統樹

以下の系統樹は STEDT による分類から主要な部分を抜粋し、一部は改変したものである。STEDT の Jingpho-Asakian は Jingpho-Luish とし、この言語群については筆者のかんがえにしたがって下位分類をしめした。また、**附録 1** でとりあげた主要な言語または言語群については**太字**でしめした。



[注101] 採譜はスコア・クリエイションに依頼した。なお、語境界はかならずしも (32) と一致しない。

参考文献

【日本語文献】

澤田英夫（2001）「ビルマ文字のローマ字転写方式（澤田式）」（http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burroman.pdf : 最終閲覧 2016 年 11 月 7 日）

藤原敬介（2012）「ルイ祖語の再構にむけて」『京都大学言語学研究』31: 25–131.

藤原敬介（2014a）「チャイレル語の系統再考」『日本言語学会第 148 回大会予稿集』272–277.

藤原敬介（2014b）「ルイ祖語の再考」『京都大学言語学研究』33: 1–32.

藪　司郎（1993）「ルイ語群」、亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第 5 巻【補遺・言語名索引編】』東京: 三省堂、pp. 448–449.

【漢語文献】

徐悉艰・肖家成・岳相昆・戴庆厦（编著）（1983）『景汉辞典』昆明: 云南民族出版社.

【その他の言語の文献】

Benedict, Paul K. (1972) *Sino-Tibetan: a conspectus*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bradley, David (1979) *Proto-Loloish*. London: Curzon Press.

Brown, N. (1837) Comparison of Indo-Chinese languages. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 6: 1023–1038.

Brown, R. Grant (1911) The Tamans of the Upper Chindwin, Burma. *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 41: 305–317.

Brown, R. Grant (1913) *Burma gazetteer: Upper Chindwin district, volume A*. Repr. Rangoon 1960: Superintendent Govt. Printing and Staty., Union of Burma.

Bruhn, Daniel W. (2014) A phonological reconstruction of Proto-Central Naga. Ph.D. Dissertation, University of California, Berkeley.

Burling, Robbins (1983) The Sal languages. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 7(2): 1–32.

Damant, G. H. (1880) Notes on the locality and population of the tribes dwelling between the Brahmaputra and Ningthi rivers. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, New Series* 12: 228–258.

Devi, Lairenlakpam Bino (2002) *The Lois of Manipur (Andro, Khurkhul, Phayeng and Sekmai)*. New Delhi: Mittal Publications.

French, Walter T. (1983) Northern Naga: a Tibeto-Burman mesolanguage. Ph.D. Dissertation, The City University of New York.

Grierson, George A. (ed.) (1904) *Linguistic survey of India, Vol. III, part III, Kuki-Chin and Burma groups.* Repr. Delhi 1994: Low Price Publications.

Hodgson, Brian Houghton. (1853) On the Indo-Chinese borders and their connexion with the Himálayans and Tibetans. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 22: 1–25.

Joseph, U. V. and Robbins Burling (2006) *The comparative phonology of the Boro-Garo languages*. Mysore: Central Institute of Indian Languages.

Kurabe, Keita (2015) The loss of the proto-velar finals in Standard Jingpho. Paper presented at the 25th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, Payap University, Chiang Mai, Thailand.

LaPolla, Randy J. and David Sangdong (2015) *Rawang-English-Burmese dictionary (A Tibeto-Burman language spoken in Myanmar)*. Privately published for limited circulation.

Lewis, M. Paul, Gary F. Simons and Charles D. Fennig (eds.) (2016) *Ethnologue: Languages of the World, Nineteenth edition*. Dallas, Texas: SIL International, Online version: http://www.ethnologue.com.（2016 年 9 月 2 日閲覧）

Li, Fang Kuei (1977) *Handbook of comparative Tai*. Honolulu: The University Press of Hawaii.

Lowis, C. C. (1919) *The tribes of Burma*. Rangoon: Office of the Superintendent, Government Printing, Burma.

Luangthongkum, Theraphan (2013) *A view on Proto-Karen phonology and lexicon.* (unpublished ms. contributed to STEDT).

Luce, G. H. (1985) *Phases of Pre-Pagán Burma: languages and history*, vol. I, II. Oxford: Oxford University Press.

Matisoff, James A. (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: system and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.

Matisoff, James A. (2013a) The dinguist's dilemma: regular and sporadic l/d interchange in Sino-Tibetan and elsewhere, In Tim Thornes, Erik Andvik, Gwendolyn Hyslop and Joana Jansen (eds.) *Functional-historical approaches to explanation: in honor of Scott DeLancey.* [Typological studies in language vol.103], Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 83–104.

Matisoff, James A. (2013b) Re-examining the genetic position of Jingpho: putting flesh on the bones of the Jingpho/Luish relationship. *Linguistics of the Tibeto-Burman*

Area 36(2): 1–106.

McCulloch, Major W. (1859) *Account of the valley of Munnipore and of the hill tribes; with a comparative vocabulary of the Munnipore and other languages*. Selections from the Records of the Government of India (Foreign Department). No. XXVII. Calcutta: Bengal Printing Company Limited.

Morey, Stephen. (2007) Draft dictionary, Singpho (Numhpuk Hkawng) – English. ms.

Mortensen, David R. (2004) The emergence of dorsal stops after high vowels in Huishu. *Berkeley Linguisitcs Society* 30: 292–303.

Mortensen, David R. (2012a) The emergence of obstruents after high vowels. *Diachronica* 29(4): 434–470.

Mortensen, David R. (2012b) *Database of Tangkhulic languages*. (unpublished ms. contributed to STEDT).

Nishi, Yoshio (1999) *Four papers on Burmese: toward the history of Burmese (the Myanmar language)*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

Sao Tern Moeng (1995) *Shan-English dictionary*. Kensington, Maryland: Dunwoody Press.

Shafer, Robert (1974) *Introduction to Sino-Tibetan*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Sun, Jackson (1993) A historical-comparative study of the Tani (Mirish) branch in Tibeto-Burman. Ph.D. Dissertation, University of California, Berkeley.

VanBik, Kenneth (2009) *Proto-Kuki-Chin: a reconstructed ancestor of the Kuki-Chin languages*. STEDT Monograph Series No. 8. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project, Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.

（附記）

本稿は科学研究費補助金（課題番号 16K02691）による研究成果の一部である。また本稿は、日本歴史言語学会第 4 回大会（2014 年 11 月 30 日、国立民族学博物館）、第 72 回言語記述研究会（2016 年 5 月 8 日、京都大学文学部）、2016 年ビルマ研究会（2016 年 5 月 15 日、京都大学稲盛財団記念館）での発表資料に加筆・修正したものである。

On the genetic position of Taman reconsidered

HUZIWARA Keisuke

Abstract

Taman is a Tibeto-Burman language once spoken in and around Htamanthi, Upper Burma. Taman materials are limited to only a list of 75 words recorded in Brown [1911]. On the basis of these vocabularies, Taman is usually believed to be a language closely related to Jingpho or Luish languages [Benedict 1972, Shafer 1974].

It is true that now almost all the Taman people speak only Burmese and Tai Naing (a variety of Shan spoken in Upper Burma, also known as Red Shan). However, in my last visit to Htamanthi in 2015, I met a Taman old woman who still remembered some words in Taman. Although she has forgotten almost everything about the Taman language, she has managed to recall some basic expressions as well as one short song in Taman.

In this paper, I have examined these new materials as well as old ones recorded in Brown [1911] to decide the genetic position of Taman within Tibeto-Burman.

The findings in this research can be summarised as follows.

1. Following phonemes can be postulated in Taman: /a, e, ɛ, i, ɨ, ɐ, o [ɔ, ɑ], u, ə; p, p^h, t, t^h, c [ts, tʃ], k, m, n, ŋ, r, l, s (s^h), ʃ, x, h, w (v), y/
2. There are five striking innovations from PTB to Taman: (a) raising of low vowels (PTB *-a > Taman -ɔ), (b) fricativization of velar stops in word-initial positions (PTB *k- > Taman x-), (c) loss of velar stops in word-final positions (PTB *-ak > Taman -a), (d) addition of velar stops after high vowels (PTB *-i/-u > Taman -ek/-ouk), and (e) affrication of **gry-* (PTB *gry- > Taman c-).
3. It is possible to point out some characteristic words which can be found almost only in Luish and Taman such as a negative prefix (Proto-Luish *a-, Taman *ʔə-*), PUT (Proto-Luish *péy, Taman *pe*) and GO / WALK (Proto-Luish *ha, Taman *hɔ*) as well as the lexical innovation of 'sun' in which 'eye' is included. Still, it is hard to tell whether Taman is Luish or not.
4. Taman can be labelled as a "link language" as it contains various types of vocabularies found in different branches of TB languages in and around North-eastern India and Upper Burma.

Keywords: Taman, Tibeto-Burman, Luish, comparative linguistics, link language

受領日　2016年9月18日
受理日　2016年11月26日